

## モラトリアム研究者の思い出

—日野舜也さん座談④ スーダン、アフリカその後、そして京都へ—

鷓飼 正樹

日本のアフリカ都市研究のパイオニアである日野舜也さん（京都文教大学人間学部文化人類学科元教授）の語りおろし、「モラトリアム研究者の思い出」も第4幕、いよいよ最終回である。これまでの「①北海道時代」（『人間学研究4』）「②タンザニア」（『同5』）「③カメルーン」（『同6』）はいずれも好評で、わたしも思いがけない人から「日野さんの話、おもしろかったよ」と声をかけていただいたことがあった。もちろん、この「おもしろさ」は、日野さんのお話の内容と語り口ゆえのことなのであるが、ぜひお話をお聞かせくださいと日野さんをお願いしたわたしとしては、「やっぱりおもしろいでしょう」と、ちょっと自慢したくなるのであった。

今回は、1982年から始まったスーダンでの調査を中心に、その後のザンジバルなどでの調査、それに京都文教大学に赴任された1996年以後も加え、日野さんの40年にわたるアフリカ研究をふりかえる話となっている。

生まれ育った北海道。東アフリカの海岸部から広がったスワヒリ文化の末端に位置する内陸都市・ウジジ。県都ガウンデレの周辺に位置し、「聖なる王」が住むバングブーム村。西アフリカからスーダンへの移民・フェラータ。日野さんのフィールドは、いつも「フロンティア」だった。そもそも、アフリカの都市人類学という研究分野じたいがフロンティアだし、勤務先であった東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所は、フィールドワークを旗印に、共同研究というスタイルで、新しい学問をきりひらく研究機関であった。2004年3月まで在職された、京都文教大学人間学部文化人類学科も、新設にして日本唯一の学科であり、まさに日野さんにふさわしい職場であったといえるだろう。

ただ、フロンティアなどというと、燃えたぎるようなバイタリティーとか脂ぎった闘争心とか人を蹴落としてもかえりみない功名心とかを想像しがちだが、日野さんは、がんらいそういうものとは無縁な、自然体の人である。たまたま自分の行った先が、結果としてフロンティアだったというだけのことであろう。聞き手としては、そうした落差もおもしろかった。日野さんの魅力を知るためにも、ぜひ第1幕から通して読んでいただきたいと思う。

今回のお話をうかがった2004年3月から、すでに3年がすぎ、その間に日野さんには、原稿のチェックだけでなく、もともとのテープ起こし原稿に大幅な加筆をしていただいた。おかげで、これまで以上に詳細かつ正確で、しかもおもしろい話になった。ただ、その結果、今回は日野さんご自身の著述とっていいほどで、編著者としてわたしの名前を出すのが妥当かどうか、正直なところ、かなり迷った。しかし、最終的に編集し、本文についての責任を負う者として、あえてわたしの名前での編著とすることにした。

なお、今回も煩雑なテープ起こしは、京都文教大学大学院文化人類学研究科院生（当時）の片岡千代子さんにお世話になった。

日野さんは今回の話のなかで、大学時代の恩師との「出会い」、アフリカとの「出会い」を「ラッ

キー」「一期一会」「縁」としている。そして、アフリカでは「運が良かった」、アフリカへは「いちばんいい時に」行けたという。連載の最終回にあたって、これらのことばをそのまま、日野さんとわたしとの「出会い」にもお借りしたい。

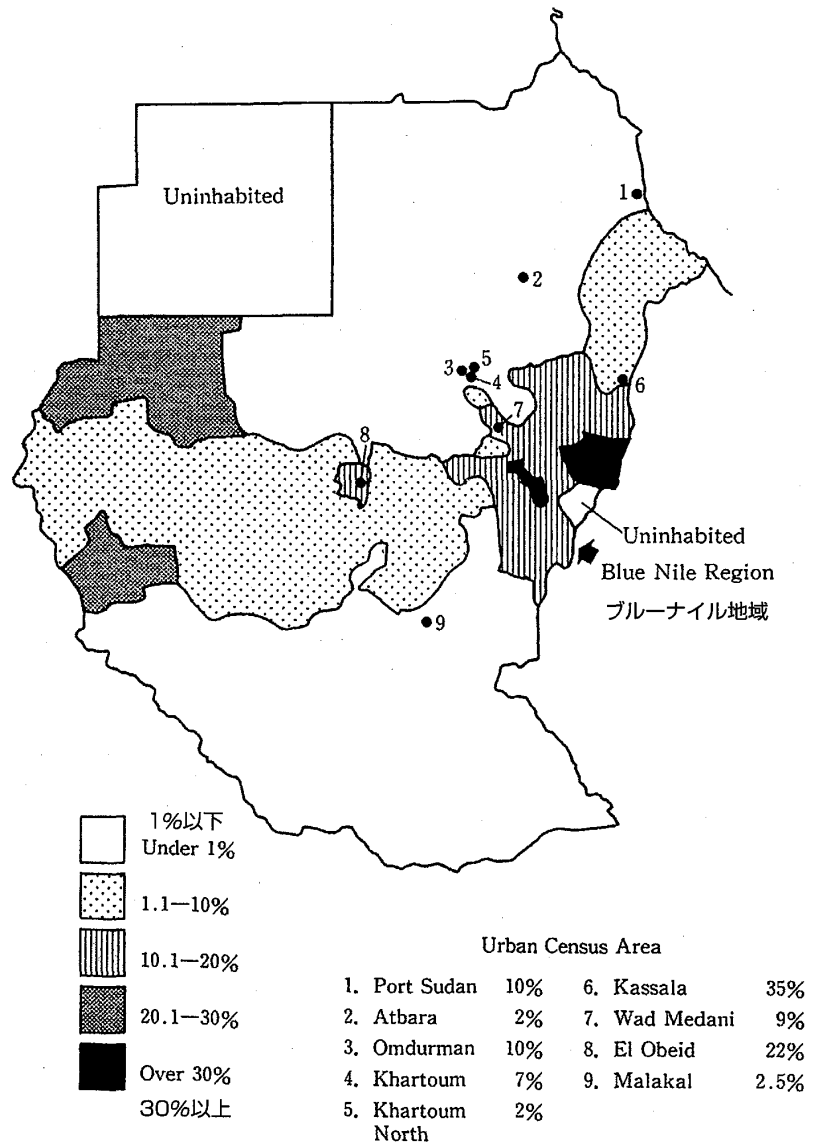
スーダンのフルベ・フェラータ

西アフリカのカメルーンやナイジェリアを調査していたときに、「わたしのおじいさんの兄弟がメッカに行って、そのまま帰って来ない」というような話が、ずいぶんたくさん出てきました。そういう人たちはもちろん、もうすでにメッカにはとどまってははいない、ほとんどメッカへの入口のスーダンにまだいるだろうということで、スーダンにいる西アフリカからの移民の調査をやろうと、いろいろ文献を集め始めたら、やっぱりいるんですね。そういう人たちのことを、スーダンでは「フェラータ (Fellata)」というんです。語源論というのは、だいたい当てにならないんですけど、フェラータのフェラは、おそらくフルベ語。フルベは自分のことプッロ (複数フルベ)、ハウサ語ではフラといいます。そのフルベ、フラがアラビア語風にとりいれられて、フェラータになったんだと思うんですが……。ともかく、フェラータ。植民地の英語の用語では「ウェスターナー」。アラビア語では「アン・ナース・ル・ガルブ」。西の人という意味ね、そういう名前では呼ばれている人たちがいるんです。

人口学者バラモンの調査によると、そういう人たちがスーダンのセンサスでは、全体で少なくとも120万人いる。さらに、そのバラモンの推測によれば、アラブを自称している隠れフェラータをいければ、スーダンの人口の半分ちかくはその西から来た人だということが書かれています。それはちょっと大げさとしても、統計で

出てくるのが120万人。スーダンの人口が約2000万人ですから、15分の1以上ということになりますね (資料1)。

それで、そのフェラータの調査をやろうということで、スーダンのカルトゥム大学にアフリカ・アジア研究所というのがあったけれども、その研究所の共同研究員にしてもらって調査をやるということになって、1982年にスーダ



資料1 スーダンにおけるフェラータの分布  
Distribution of West Africans according to the 1955-1956 Census.  
(Balamon: 1978, p. 68 より)

ンに行ったんです。「スーダン・サーヘル地帯における移住と地域形成の調査研究」という科  
研で、研究代表者は富川盛道さんでした。

それで、カルトゥム大学で調査の計画の発表  
をしたら、「そんなことおまえにはできないだ  
ろう」といわれました。第一に、おまえのア  
ラビア語の語学力では調査はできないぞと。それ  
はたしかですが……。それから、そのフェ  
ラータの多くは、じつはオーバーステイ、不法  
滞在だということです。「メッカへ行きます」と  
いって、ナイジェリアやカメルーンのパスポ  
ートを持ち、ヴィザを取って、そのまま帰って  
いないわけだから。何か起こったらスーダンから  
「出て行け」って言われる可能性があるから、  
おまえが行って「あなたはフェラータか？」  
って聞いても、「はい、そうです」というわけが  
ない。「わたしはアラブです」というにき  
まっている。つまり、バラモンがいう隠れア  
ラブになっている。「だから、調査になりませ  
んよ」といわれました。これでわたしもめげた  
んですけれど、やめるわけにはいかないとい  
うことで、フェラータが多数いるといわれるブ  
ルーナイル沿岸部のエル・ロセイレス (Er  
Roseires) というまちまで行きました。乗り合い  
トラックにゆられて、途中で1泊の野宿とい  
う旅でした。夜は蚊の大群に遭いました。行く  
先々のまちでは、アラブ人の屋敷の前に、サダ  
カ (喜捨) 用の飲み水の水がめが置かれて  
いて、旅人への心遣いが印象的でした。

エル・ロセイレスは、かつてブルーナイルの  
東岸の氾濫域だったのか、砂上楼阁といっ  
てよほどの砂に埋もれたようなまちでした。  
ただ、家々がカメルーンのむらと同じよう  
な、草べいにかこまれて、いくつかの円錐  
形の家で、はじめて来たのに、Deja-vu  
という感覚で、なにか懐かしい感じが  
したのを覚えています。考えてみれば、お  
なじブルベが作ったまちですから、当然  
なんですけれどね。そこで82年、84年  
にフィールドワークをやることになりました。

スーダンのフェラータも、西アフリカ  
の文化からいうとフロンティアですね。  
だから、これも、アダマワよりもっと、  
もっとフロンティ

アの方から見たということになります。

スーダンの公用語はアラビア語です  
から、わたしは日本で1年間アラビア語  
の学校に行き、勉強しました。日本のア  
ラビア語学校では何を教えるのかとい  
うと、コーランの読み方を中心に教  
えるわけで、会話としては、役に立た  
なかつたんですけれどもね。

アラビア語の挨拶に、「アフラン  
ワ サハラン」というのがあるですが、  
この発音がわたしにできない、そう  
すると耳ざといエル・ロセイレスの  
子どもたちが聞きつけて、わたしに  
いってみろというのです。そして、ど  
っと笑う。つぎは近所の子どもを連  
れてやってきて、わたしにしゃべって  
みるというわけです。そして、どっ  
と笑うのです。だんだん子どもの数  
はふえてくる。大人はともかく、子  
どもたちは容赦がないわけです。そ  
のへんが、スーダンは、いままで  
つきあってきたアフリカと大きくち  
がってました。それで、アラビア語  
は挫折しました。

もうひとつおもしろかったのは、  
エル・ロセイレスのレストランです。  
今日は何があると聞けば、大声で  
その日のメニューを怒鳴ります。そ  
れを聞いて、自分のほしいもの  
のところで、「それだ」とい  
うのです。これは、できるよう  
になりました。

今でも辞書をひきひきならアラ  
ビア語は読めます。ほとんどしゃべ  
れないけど、時間をかければい  
ちおう読めます。

#### 調査地エル・ロセイレス

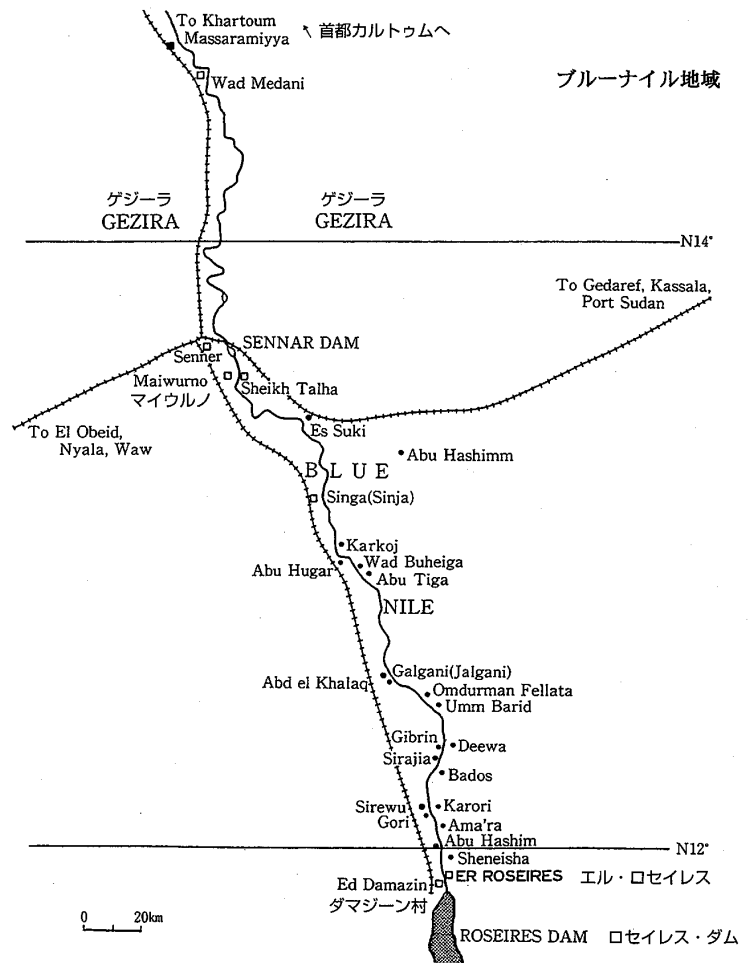
エル・ロセイレスは、ブルーナイル  
東岸にある、人口が5000人ちょ  
っとのまちです。その近くのブルー  
ナイルのやや上流部にロセイレス・  
ダムというダムができて、そのダ  
ムのブームタウンになったところ  
です。じつは、本当のブームタ  
ウンは、対岸の小村ダマジーン  
で、スーダン鉄道のエ  
ル・ロセイレス駅があ  
った場所にあ  
たらしいまち  
が作られました。  
駅や飛行場、  
建設事務所  
や主要官庁  
はそこにあり  
ます。エル・  
ロセイレス  
は、8キロ  
くらい離れた  
対岸、つまり  
東岸になる  
わけです。ダ  
ムの放流場  
所近くに橋  
があって、  
白い水煙を  
上げて、見  
事な景観な

んですが、警備隊が常駐していて、写真を撮るなんてとんでもない話で、だからるか遠景からの写真しかありません。そのあいだには、常時乗り合いバスが走っていて、エル・ロセイレスのかなりの方は、ブームタウンのダマジーンに職を得て通勤しています。そのエル・ロセイレスにフェラータがいっぱいいるという情報が入ってきて、そこを調査するという事になったわけです。

この地域はブルーナイル地域といいます。ナイル川というのは、ひとつは、ウガンダのヴィクトリア湖源流に端を発する、いわゆるホワイトナイル。それから、エチオピアのタナ湖から、エチオピア南東部をぐるっと回って、スーダン中部に達するブルーナイルがあって、それがちょうどスーダンの首都のカルトゥム（Khartoum）のところで合流するんですね。ちなみに、ホワイトナイルの方が有名ですが、ブルーナイルの方が水量が数倍あって、かつ、水流が早く、ダムを造るのには適しています。そのブルーナイルの流域に、フェラータがずいぶん多いということがわかりました（資料2）。

最初の予備調査は、ダマジーンのダム建設事務所の宿舎に泊めてもらって、そこから、エル・ロセイレスに通うことにしました。もう、くそ暑いところでねえ。昼間暑くて、仕方なくベッドに寝っころがっているんですけど、暑くてどうしようもない。そこで、土間にばあーっと水をまくと、蒸発して、しばらくはいくらか涼しいんです。クーラーなんてもちろんない。カミさんと一緒に行ったんだけど、かなりたいへんでした。

そのときは、まだ禁酒令が比較的ゆるやかで、ギリシャ人が経営する店に夜に訪ねて行けば、まずいラクダ印のビールが飲めたのですが、二度目の時は、酒類を持っていると、むち打ち30回、そのあと国外追放ということで、むち打ちはともかく、国外追放になってはかたまりませんので、5ヶ月ほどは禁酒しました。調査がすすんできて、終わり近くに、密造の蒸留酒



資料2 スーダンのブルーナイル地域

が手にはいることがわかって、ときどき飲んでいましたが……。これはおもに、エチオピアからの難民の仕事でした。これがまたおもしろいのです。まちなかの民家にある密造のアジトに行くと、注文して、お金を払っておくと、いつの間にか、わたしの屋敷のへいのそばに、ビンがさりげなく捨ててあるのです。それをわたしがひろって家に持って帰る。もちろん、注文しただけの密造酒が入っています。それはともかく、こんなに長い間禁酒したのは、高校以来の経験でした。話が協道にそれました。

二度目はエル・ロセイレスに部屋を借りて、もうちょっと長く住み着きました（1984年7月～85年2月）。そこでわかったことは、ちゃんとした統計はありませんけれど、フェラータの人たちは、民族的にいうと、その85%から90%はナイジェリア北部のハウサ（Hausa）という民族なんですね。ハウサというのは、ナイジェリ

アの北からニジェールの南にかけている、大きな農耕と商業民族です。そのハウサが大半で、じつはわたしがカメルーンで調べていたフルベの人は、おそらく10%強くらいしかいない。ところが、エル・ロセイレスは、1906年にできたといわれてるんですけど、ハウサは農耕と漁業に従事している10家族くらい、のこりはフルベが千数百人くらいいるんです。人口5000人のまちの、3分の1くらいはフルベ、大半はアラブ人で、あとは周囲の諸部族民、それに内乱を逃れてきたエチオピア難民たち、そういうまちなんです。そこで調査を始めたわけです。

エル・ロセイレスでは、最初にカルトゥム大学で言われたことは、あんまり心配がいらないうことがわかりました。それはなぜかというと、おおくのフェラータがフルベ語もしゃべれるんです。かれらも普段はアラビア語をしゃべっています。学校でもアラビア語以外をしゃべったら叱られるんですけども、フルベ語を知っている。だから、わたしがあまり上手でもないフルベ語でインタビューすると、かえって喜ぶんですね。喜んでインタビューに応じてくれる。カルトゥム大学のアラブ人研究者には、そういうことは理解しようとしめないのね。だけどわたしも、ブーム語はまあ少しはうまいけど、フルベ語はペラペラしゃべるほどにはいかないから、片言ですね。だからエル・ロセイレスでは、ライフヒストリーなんかは、通訳を使って英語とアラビア語で調べました。

あとで出てくる下宿のおばさんに20歳くらいの娘がいました。その娘とわれわれがフルベ語で話しているのを聞いたおばさんが、涙をながして、「わたしはいままで娘がフルベ語をこんなに話せることを知らなかった。アラビア語しか話せないと思いこんでいた」と。それから、娘とフルベ語も交えて話をするようになりました。

#### 西アフリカからのメッカ巡礼

エル・ロセイレスでの話はさておき、西アフリカから来た人の歴史というのがおもしろいので、その話をまずやりましょう。

西アフリカの、いわゆるサバンナ地帯は、だ

いたいもう11世紀くらいからイスラームの社会でした。メッカへ巡礼するというのは、イスラーム教徒の5つの柱、礼拝や断食と並んで、イバーダードというイスラームの信仰の5つの柱の中のひとつです。ただし、コーランの中には「おまえが周りの人にいろんな迷惑かけるのなら行かなくていいよ」って書いてあるんですが、まあ、敬虔なイスラーム教徒であれば、メッカ巡礼はやるべきものなんですね。

今だったら飛行機でメッカに行きます。巡礼のシーズンになりますと、ナイジェリアにたくさんチャーター機が集まって、飛行機でメッカまで行くんですけども、昔はもちろん歩いて行くわけです。しかも、全財産を担いで歩いて行くと、強盗などにやられますし、それにもともと金はそんなにもっていないわけですから、多くの人たちは、あるまちへ行って働いて、そこで金ができたら次のまちへ行ってまた働いてというような旅です。

カメルーンで聞いた、わたしの知っているいちばん長い例では、18年かかって帰ってきたという人がいます。バークスという研究者の調査によると、西アフリカからメッカの往復が平均4年半か5年というのが普通です。しかも、それは、ある程度のファシリティが整った1960年代くらいで、現代の話ですから、昔はもっとかかったのにちがいないですね。

#### 西アフリカのマフディ思想

同時に、西アフリカでは、マフディ (mahdi) 思想という、イスラームの中でも特殊な思想がかなり普及しているんです。これは、いまもイスラームの思想のなかにある考えですが、16世紀くらいにアブドゥラフマーン・アッスユーティというイスラームの先生が、エジプトではそんなこと言ったら、あまり相手にされないの、西アフリカに行つてそこで説き回つたらしいのだけでも。

これは、キリスト教にもありますが、いわゆる終末思想ですね。この世がそのうち終わって、その後に千年王国、人びとがみんな幸せな時期を送って、それで最後の日が来るんだという。この世を救うために現れる人が救世主です

ね。それを、アラビア語ではマフディっていうんです。そのマフディが現れるということ、しかもイスラーム暦の14世紀の最後あたり（現行暦では19世紀末期）に現れるということ、その先生が説いて回ったらしいんです。マフディが、メッカか、あるいは、いろんな俗説があるんだけど、ナイル川のそばだとか、ともかく東の方に現れる。今でも北ナイジェリアでは、何年かに一度は「わたしがマフディだ」というような乱を起して殺されちゃう人が出るんですけども。それで、ともかく東方にマフディが現れるということで、メッカに少しでも近づいてそこで死ぬ、最後にマフディが現れば、われわれは極楽に行けるという考え方があって、ともかくメッカに巡礼に行く。その途中で死んでも幸せだという、そういうような考えがあるわけです。

ところが、1820年ごろに、北ナイジェリアでウスマーン・ダン・フォディオという人が、かれはフルベのイスラーム指導者ですけども、「ハウサのイスラームは墮落している。われわれは真っ当なイスラームの国を作るんだ」というので、ハウサに対してジハード（聖戦）を起こしたんです。ナイジェリア北部一帯を支配して、神聖イスラーム王国を建設するのです。実は、わたしがカメルーンで調査したガウンデレのフルベの王様もその余波でできたのですが、ナイジェリアからカメルーンの北部にかけてのこのへんで、聖戦を起すわけです。そして、周囲を征服して、一般にはラミダットといわれる、ラーミド（支配者を意味する）を首長とするイスラームの王国を作り上げます。要するにフルベのイスラームの王、ガウンデレと同じようにラーミドという王様が支配する国がここに数十もできる。一般にフォンビナの諸王国と呼ばれています。そのいちばん東端が、アダマワのガウンデレなんですね。その時に当然のように、そのウスマーン・ダン・フォディオがマフディであるという考えが出てくるわけです。ところが、そのウスマーン・ダン・フォディオ自身は「自分はマフディじゃない、わたしはイスラームの世界をよくするために出てきたのであって、マフディではない。マフディはもっと

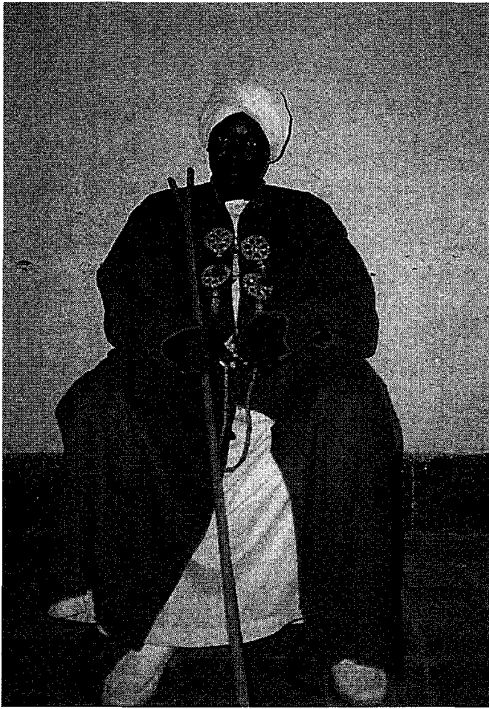
東の方に現れる」といって、自分のスパイを何十人かスーダンまで送って、「マフディがこの世に現れたら、すぐにわたしのところに知らせてくれるように」ということをやったという話もあります。

そのようなかたちで聖戦によって西アフリカにできた国が、北ナイジェリアのフォンビナとか、ニジェール川湾曲部のマシーナとかあります。ところが、みんな19世紀の末になって、植民地勢力が入って来て武力でつぶされちゃう。それで、その地域のイスラームの人たちの多くが、この世に絶望するというか、「もうここに未来はない」というので、メッカの方に向かって動き出した。みんな昔からの巡礼ルートを通っていくわけです。

そしたら1881年、まさに19世紀も終わりに近いころに、スーダンのカルトゥムで「わたしこそマフディだ」というイスラーム指導者が現れて、イギリス・エジプトの植民地連合軍をぶち破って、ゴードン将軍という有名な将軍を殺し、カルトゥムの対岸オムドゥマンを首都とするマフディの神聖イスラーム王国を作りあげます。このマフディ自身は、数年後にチフスで死んじゃうんだけど、その後を継いだ人がいるんですね。その人はアブドゥラーヒ・ビン・ムハマドゥという人ですが、実は西アフリカから来た家系らしいんです。ウェスターナーなんですね。

そして、このマフディが現れたというニュースが伝わると、それに呼応にして、植民地化で将来に希望を失った西アフリカのイスラーム教徒が、かなりたくさんこの聖戦に参加します。この人たちのことを、アンサール（ansar）と呼びます。そのアンサールのなかには、おおくのフェラータがふくまれていたようです。

でも、このマフディの国は1900年にイギリス・エジプト連合軍に負けて、滅びてしまうんです。そして、スーダンはイギリスとエジプトの共同植民地ということになります。でも、この戦争に参加する、マフディを支持するというので、西アフリカの方から行った人がまた大勢いるんです。



資料3 マイウルノの現在のラーミド

#### マイウルノのラーミド

そのころ、ナイジェリアではイギリス植民地軍とイスラームの神聖王国との戦いが起こります。そして、ナイジェリア北西部にマイウルノ（Maiurno）っていうところがあるんですけどね、そのマイウルノの支配者が、ウスマーン・ダン・フォディオの一族ですが、敗走して東方に逃げるわけです。ところが、ナイジェリアの東部のブルミというところで、植民地軍に殺されてしまうんですね。

その6男が、命からがらでスーダンまで逃げてきて、ブルーナイルのフェラータ集住地域に到達します。そこが、ナイジェリア同様にマイウルノというまちです。まさにマイウルノから来たからそう呼ばれるようになったんだけど、そのマイウルノというところに落ちていて、今も子孫がいるんです。わたしも訪ねて行ったけれども、ラーミドがちゃんと盛装してあらわれました。このマイウルノのラーミドがナイジェリアから逃げてきて、スーダンのマイウルノに住みついたのが、1906年くらいです（資料3）。

その結果、それまでメッカに行くというかたちでやってきた西アフリカの人たちにとって、精神的なひとつの核がスーダンにもできたわけ

ですね。それで、その人を盛り立てて、そこでひとつのグルーピングをする。

それには、そのころにもう始まっていたイギリスの植民地政府にとっては、都合の悪い面と都合のいい面とがありました。植民地の中にそんな集団がいても都合が悪いんですが、イギリスは間接統治だから、そういう組織はなるべく活かそうときめたようです。実際にカルトゥムの古文書館に行って調べると、当時の植民地政府とラーミドの間に交わされた書類がたくさん残っています。それによると、マイウルノのラーミドのところに、「何日までに労働者を何百人集めて出せ」という命令が来て、「そんなに言われても短期間に集められない」とか、「まだこのくらいしか集められない」とか、そういう手紙のやりとりがあるんですね。そんなことで、王様がいると、その組織が利用できるから、植民地政府は使いやすいわけですよ。また、税金を集めるのにも、「おまえの臣民から集めて来い」というようなことが言えるわけですから。だから、言うことさえ聞けば、これほど便利なものはない。この間接統治というのは、西アフリカではイギリスもフランスも常套的にやった植民地支配なんですけれどね。

#### コットン栽培の労働者としてのフェラータ

首都カルツームでブルーナイルとホワイトナイルが合流するのですが、その上流の両河の間にアル・ゲジーラ（アラビア語風にはアル・ジャジーラらしいのですが）という豊饒な地域があります。1920年代にはいって、そこにダムを造って、灌漑をして、コットンのプランテーションを作ろうという計画が始まります。エジプトはナイル川沿岸部でエジプト綿という非常に良質のコットンを生産するので有名ですよ。そのようなコットンをもっと広く作ろうじゃないかということで……。この計画は、実際成功してうまくいきました。その計画の一環として、1922年にブルーナイル東岸のセンナールに灌漑用のダムができた。

そこで、エジプトからコットン栽培の技術を持っている農民たちを移住させてコットンを作ろうとするわけです。ところが、このあたりは

熱帯です。連れられてきたエジプトの人たちはもちろんこのような熱帯に住んだことがなくて、ばたばたとマラリアなどで倒れる。それで、やる気もなくなって、朝飯を食ったまま、あとは出てこない、とかそういうことが起こります。スーダンのアラブは、朝5時ころ朝の礼拝のあとで、市場に買い物にいったら、そのあとお茶くらいのもので、そのまま働きに出て、9時ごろ職場周辺で休みをとって、軽い朝飯を食べる習慣があります。だから、その時間に銀行などへ行っても待たされるだけです。ゲジエラのアラブ人労働者は、その朝食休みのあと、もう出て来ないとか、そういうことが起こります。そのような状況にいたって、コットンをつくる農業労働者をどうするかということが問題になったわけです。

アメリカから解放ドレイを連れてこようとか、いろんな考え方があったんですが、そこへ現れたのがフェラータです。フェラータは、サバンナの農耕に詳しい。しかも、もともとコットンは西アフリカ原産ですから、ナイジェリアでもカメルーンでも、コットンを作っていた。かれらは、メッカ行きの旅費を稼ぐという意志がありますから、日当をできるだけ多く稼ごうと努力します。それで、アラブの農民が1日10ディナール稼ぐとすれば、西から来た人は40ディナールとか50ディナール稼ぐという。そのくらい働かし、技術も持っている。それから、ハウサが使っていた独特の農耕技術と農具を持ち込んで、すごく能率的にコットンの栽培をやる。そういうことで、そのころスーダンでは、「神はわれわれからドレイを取り上げたもうたが、代わりにフェラータをくださった」といわれたという話もあります。

そういう「いい稼ぎがあるぞ」というおいしい話は、今度は西アフリカへどんどん伝わります。スーダンのゲジエラに行けば金になるという話が伝わると、おなじイギリスの植民地ですし、メッカ巡礼のいい機会にもなるというので、大いにわき立ちます。出稼ぎに行くといっても、簡単には許可やパスポートをくれないんですけれども、「わたしはメッカ巡礼に行きます」といって、植民地政府だってイスラーム教

徒を押さえるわけにはいかないので、パスポートをくれるわけです。そして、パスポートをもらって、そこへやってきて働く。当然、ヴィザの期限は切れます。つまり、法的には不法滞在ということになる。でもそんな理由で貴重な労働力をうしなうわけにはいかない。というわけで、そういう滞在者が飛躍的に増えます。わたしが見た、もっとも古いパスポートは、カメルーン植民地政府が発行した1926年発行のものでした。

そのころ、スーダンとナイジェリアを結ぶ巡礼列車を作ろうという計画がありました。ところが、この話は立ち消えになってしまいます。なんで立ち消えになったのかというと、そんなものを作ったら、ナイジェリアの人たちがみんなスーダンやメッカの方に行ってしまう。植民地は労働人口がないと困りますから、そんなことがあったらたいへんだと。また、スーダンの方は、せっかく来たのがみんな帰っちゃったたいへんだっていうので、けっきょくその鉄道の計画は立ち消えになったんですね。

#### フルベのブルーナイル南部集住

ともかく、1920年代くらいから、ゲジエラで働くという名目で「メッカへ行きます」といって、行った人たちがいる。わたしが調査したところ、「わたしのおじいさんの兄弟は……」なんていうのは、だいたいそのころの人たちが多いわけね。そして、そこで、お金を稼ぐ。ゲジエラなどで1年とか2年とか3年とか働いて、お金が稼げるようになったときに、どうなるか。もちろん、国に帰った人びとも多いのですが、そのままスーダンに居残った人びともいっぱいいたわけです。かれらの大半は、さっきもいったように、ハウサです。ハウサはお金ができると何をするのかというと、ひとつはそれを資金に都市で商売をする。もうひとつは、土地を買って畑を耕す。

ところが、フルベは、すんなりと土地を買って農業をとというようなことにならない。まず、ウシが欲しい。スーダンでウシ飼育に最も適したところは、ゲジエラの南のブルーナイル沿岸の地域です。ここは、もともとサバンナ性気候



で、近くにルファーというアラブ系のウシ牧畜民がいました。いまもラクダに家財道具を満載して、ウシを連れて移動しています。ところが、20世紀はじめには、マフディの戦いによって人口が激減して、空き地になったようなところで、フルベの人たちはこのブルーナイルの南へ出てきて、そこで「金を貯めてウシを買って、牧畜をやりたい」という。もちろん、そのウシは西アフリカのフルベのウシじゃなくて、この地域のウシなんですけれども。しかも、何十頭も飼えないですから、せいぜい十数頭、多くは3頭から5頭くらいなんですけども。

そうやって、フェラータの10%しかいないフルベが、このブルーナイル南部へ集まってきたんですね。いっぽう、たとえばカッサラ、エチオピア国境近くにあるまちですが、そこなんかはハウサの人口が2万人を超すなんていうことになってるんですけれども、フルベはそういうところには行きたがらない。ウシを飼える地域に集まってくる。エル・ロセイレスというところも、メッカ帰りのフルベのイスラームの先生が住みついたということで、それを頼ってやってくる人がどんどん出てきます。

今でも、ブルーナイルのマイウルノを中心とした地域では、エル・ロセイレスもふくめて、フルベ意識というか、フルベの生き甲斐というか、西アフリカのイスラーム意識とが混合した、かれらのいうプラーク意識が、そこで維持されています。プラークという言葉は、フルベの単数プッコからきています。

#### エル・ロセイレスでの下宿はたいへんだった

エル・ロセイレスでは、あるフェラータのある家に下宿したんですけれども、たいへんでした。わたしが、カルトゥム大学で紹介され、最初に頼りにして訪ねて行った人が、エル・ロセイレス出身のフェラータで、カルトゥム大学の社会学科を出たという人です。ムハマドゥ・ハッサン・ガダルマリっていう人ですけども、そのころエル・ロセイレス地区の社会福祉事務所長でした。ものすごくファナティックなイスラーム教徒で、宗教論争かなにかで、カルトゥム大学にいる時に人を殺しちゃったって

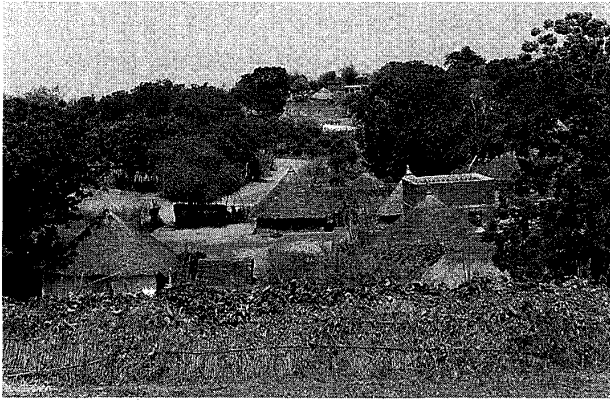
う噂もありました。

その人の世話で、その人の弟の家を借りて、わたしとカミさんとがそこに住んだんです。その弟の家族は、われわれには、とてもよくしてくれました。その弟自身は、単身でサウジアラビアに出稼ぎに行っていて、お金を送ってくる。その家には子どもがたくさんいてね。われわれはここでは相対的にはかなり金持ちですから、いろいろ食材を買ってきたりして、それからもちろんその奥さんに食費を払って料理を作ってもらう。それは家族全体の食事を意味しますので、その生活水準からいえば、かなり潤沢な金がいり、また彼女もはりきって、贅沢なおいしい料理をつくれる。近所のフルベの人たちとも仲良くなって、いい雰囲気でした。

ところが、その兄貴、つまり社会福祉事務所長がヤキモチを焼いて、「わたしがそういう人を泊まらせていることを手紙に書いたら、弟から『そんなのを家に置いてもらったら困る』という手紙が来た」というのです。だから、「もうここに置いておくわけにはいかない。そのかわりに、わたしの家へ来い」と。

だけど、そういう人だからわたしはあまり気も合わないしね。それで、仕方がないのでわれわれが借りていた隣の家のおばちゃんに、「こんなことで、いるところなくなったんだけど置いてくれないか」といったら、そこも息子が出稼ぎに行っているんで家が空いています。最初は「息子が帰ってくるかもしれない」とかいつてたんだけど、「まあいいわ、うちへおいで」っていうことになって、ある晩ひそかに、カミさんと2人で荷物を全部まとめてそっちへ移っちゃった。まあ、何ととっても何十メートルも離れていないんですから、前の家族とも仲良くくらししました。それで、その社会学者がカッカとして、たいへんだったというようなこともあって。

そこへ富川さんもやってくるということになって、それがまたたいへんだったんですよ。社会学者に頼めばうちに来いというにきまつてるし、それは頼みたくない。わたしらは夫婦だから、まだ安心して貸してくれるのだけれども、男でも女でも、独り身の人があれば、必ず



資料4 ロセイレスの民家

正面のアラブ風の住居を除けば、一見西アフリカの民家のたたずまいと変わらない

誰かとトラブルを起こすと信じている。だから、富川さん1人のために部屋を探すだけでも、見つからない。いくらそこいらのおばちゃんに頼んでもだめ。それで、「仕方がない、せまいわたしらの家に泊まってもらうしかないか」というところでいたのですが、「あそこなら空いてる」という、ほんとに1軒家で誰もいない空き家があって、そこを富川さんのために借りました。ベッドや机、イスなんかを持ち込んでね。食事は、数分歩いてわたしの家に来るといわけ。富川さんは、広い庭の木陰にイスなんかだしたりして、そういう生活をすごく楽しんでくれましたけどね。

#### エル・ロセイレスのフェラータ

エル・ロセイレスのまちは、先にもいったように、ちょっと見たら、「これ、西アフリカのまちじゃないかなあ」というくらい、ほんとうに西アフリカによく似ているんです。屋敷を草堀で囲んで、その中に円錐形の屋根を持った丸い家を建てている。ただ、その中にアラブ風の、いわゆる平屋根のレンガ建ての家もある。それがあつた家は、だいたいサウジアラビアに出稼ぎに行っている家です。出稼ぎでお金があつて仕送りがあるから、そういう家が建てられるわけです。レンガ建ての家がある屋敷は、サウジアラビアに出稼ぎに行っていると考えてもいいくらい(資料4)。

あとで触れるように、エル・ロセイレスのフェラータには、学歴のあるインテリが多いか

ら、多くは英語もできる。サウジアラビアの油田には、インドやインドネシアから労働者がいっぱい来て働いているんですが、かれらは労働者の頭になって、アラビア語と英語を駆使して、雇い主のアラブ人との間で、出稼ぎ労働者との、仲介の仕事をやるんですね。それがすごくいい金になる仕事らしいんです。エル・ロセイレスから、多分、50人以上のフェラータがサウジアラビアやアラブ首長国に行っています。

エル・ロセイレスのフェラータたちに、パスポートを実際に見せてもらったけど、かれらの多くは、まだ西アフリカのパスポートを持っているんです。もちろん、ヴィザはとっくの昔に切れている。つまり、法的に言えば不法滞在なんですね。

その不法滞在の人たちが、やっぱりこの国で生き残りを賭けなきゃならない。だけど、政治的な力は絶対にもてない。持とうとすれば、自分の足元がすくわれるかもしれない。権力はアラブ人がみんな握ってますから。そこで、何とか自分たちが生き残る方法はないかということで、思いついたひとつが教育です。つまり、一生懸命に金を工面して子どもを学校にやる。だから、このエル・ロセイレスっていうまちがあるブルーナイル地域では、大学へ行っている学生が毎年20人とか出てくる。その南のインゲセナというところは、まだ歴史が始まってから大学を出たのは1人だけなどという話なんですけれど。

大学にいったって何をさせるかということ、技術を身につけさせる。特に工学部に行って技術を身につける。大学へ行けない子どもたちにも何か技術を身につけさせる。それで、どういうところに就職するかということ、ひとつはスーダン国鉄です。スーダンの国有鉄道の職員の半分くらいが、フェラータの人です。それから、自動車の運転や修理のガレージ、そういう仕事にもかなりたくさんの方がつく。同時に、学校には行かずに技術を身につけるといので、靴直し、桶直し、裁縫師、それから鋳掛屋さんなどをやる人たちも出てきた。実際に、エル・ロセイレスの市場に行くと、そういう人たちが、今でも靴直しや裁縫師とかをやっているんですね。あとは、ウシの治療師とか、ウシの薬売りとか、

ウシの博労とか。

不法滞在ということがわかっていても、そういう人たちを、なかなかスーダンに追い出せないんです。その第一の理由は、サウジアラビアからの送金がスーダンのGNPの何%かを占めていて、それを主に稼いでいるのはフェラータの人だから。それから、彼らがいなくなったら、鉄道は動かなくなるし、自動車も動かなくなる、壊れたままになるという可能性もある。だから、簡単には追い出せないわけです。それでも、やはりそういう不安はあって、フェラータの人に聞くと「われわれは昔からここにいたんだ」と主張する人もずいぶん多いんです。だけど、深くつきあうと、そうでない人の方が多いんですけどね。

#### フェラータの人たちの底意地の悪さ

フェラータの人たちは、たしかに西アフリカのフルベと多くの共通点があるのですが、アラブ的な、何ともいえない底意地の悪さというか、人を見くびってからかってという感じがありました。客人に対しては、一方では、たいへん親切です。旅人のための水がめが用意されていたり、お茶屋でコーヒーを飲んでいたり、いつの間にか誰かが代金を払っておいてくれているとか。でも、同時に、寄ってくる他人をからかったり、コケにしたりすることを、ひそかに楽しんでいるという空気が感じられました。大人たちは隠微に、子どもたちは、もっとあからさまに。わたしのつたないアラビア語をみんなによってたかってからかったり、歩いていると、うしろについて歩いてきて、わざと追い越しざまに砂を蹴立てたり、いろいろありました。

こういうこともありました。イギリスからきたピースコープ（平和部隊）の女性の2人組が、快適そうに見えるわれわれの生活を見て、われわれの帰国後に、われわれが住んでいた家を借りたいとやってきました。家主のおばさんは、「いいですよ、どうぞどうぞ」と返事をして、彼女らが帰ったあとで、態度は急変、「とんでもない。あんな独り身の女性に貸したりするものですか。ヒノ、おまえ行って上手に断っておいで」と言い放ちました。独り身の富川さ

んの住む家がなかなか見つからなかったのも、このようなことだったのでしょね。

このエル・ロセイレスでのフェラータ調査はけっこう楽しくもあったのですが、わたしの調査歴のなかでは、いちばん落ち着かない、トラブルの多い場所でした。こんなことは、タンザニアのウジジ調査や、カメルーンのフルベ調査では、まず経験しなかったことで、やはりアラブ文化との接触がもたらしたものだろうと思います。いくらか近いとすれば、あとで触れるザンジバルのスワヒリ文化にもすこし共通する点があるのかなあと思います。そういえば、ザンジバルもアラブ文化がかかっていますね。

#### フェラータのファミリー・ヒストリー

エル・ロセイレスでは、フルベのファミリー・ヒストリーを調べました。家族史ですね。家族史の、まだ整理していない100人以上の質問用紙調査があるんですが……。まあ、それはそれとして、そのなかの30人ほどにかなり詳しいインタビューをしました。だけど、アラビア語でというわけにはいきませんので、アラビア語と英語ができるフェラータの青年を1人雇いまして。仕事に興味を持って、よく働いてくれました。一緒に行って、わたしは英語で聞いて、アラビア語で聞く、それを全部テープにとって、後でそれをその青年の助けを借りて、文章に起こす、そういうことをやりました。

エル・ロセイレスのまちで靴直しをやっていた1人のおじいさんがいました。その人がライフヒストリーを語り出したら、「わたしのおじいさんはカメルーンのマルマ（Marma）というところから来た。そして、途中で同じ巡礼に来た人と知り合って結婚して、メッカへ行って、それからこのまちに住みついた」という話をします。それで、彼はその靴直しの技術を学ぶために国中を歩いてというようにいってました。マルマというまちは、ガウンデレから20キロくらい南西にあるんですね。

それで、スーダンで、かれら家族の写真を撮って、そのあと、カメルーンのマルマを訪ねたんです。草深いウシ飼いフルベのむらでした。そしたらそこに、そのおじいちゃんの兄弟

の孫がいて、「わたしはその人の顔も見たことないけれど、知っている。そういう話は聞いている」というんです。そこで、今度はマルマで家族の写真を撮って、その次に行くときに、そのスーダンのおじいちゃんに届けるということもやりました。かれの戸棚にいっぱい飾って、よい贈りものができました。

それからまた、そのころ90いくつのおばあちゃん、[わたしはカメルーンのニャンバカ(Nyambaka)で生まれた]という人がいました。ニャンバカというのは、やっぱりアダマワ地域で、200キロくらいガウンデレから離れたところなんです。そして、わたしが調査した1980年代の20年くらい前のことですが、そのおばあさんの妹が旦那と一緒にメッカへ巡礼に行くときに、ここへ訪ねて来たそうです。顔が全くそっくりだったというわけ。そのときに、スーダンのおねえさんの息子の1人を付き添いにつけて、カメルーンまで帰ったといいます。その息子が、カメルーンまで来て1年ほどガウンデレに住みつき、自動車の修理の仕事をして、それから帰ってきて、今は自動車の運転手をやっている。思いがけないところで、西と東の結びつきが出てきたんです。

そういうファミリー・ヒストリーを30ほど取った論文を、『SUDAN SAHEL STUDIES』の第2巻に書きました(Pilgrimage and Migration of the West African Muslims: a Case Study of the Fellata People in the Sudan)。これは、のちに、サウジ

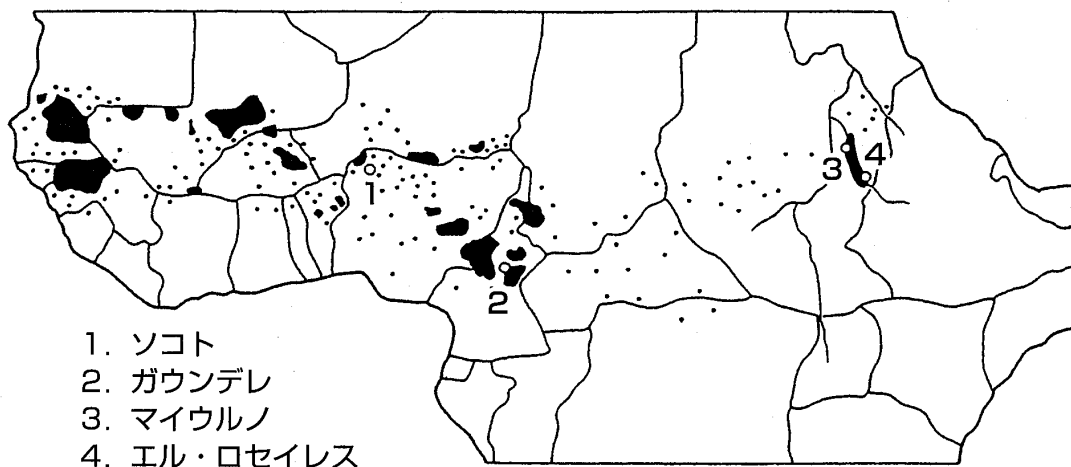
アラビアの研究者から、アラビア語に翻訳する許可を求める手紙がきました。「できあがった訳書を1部、送っていただければいいよ」と返事したのですが、今までには、返答がありません。どうなりましたか。

### フルベの移動

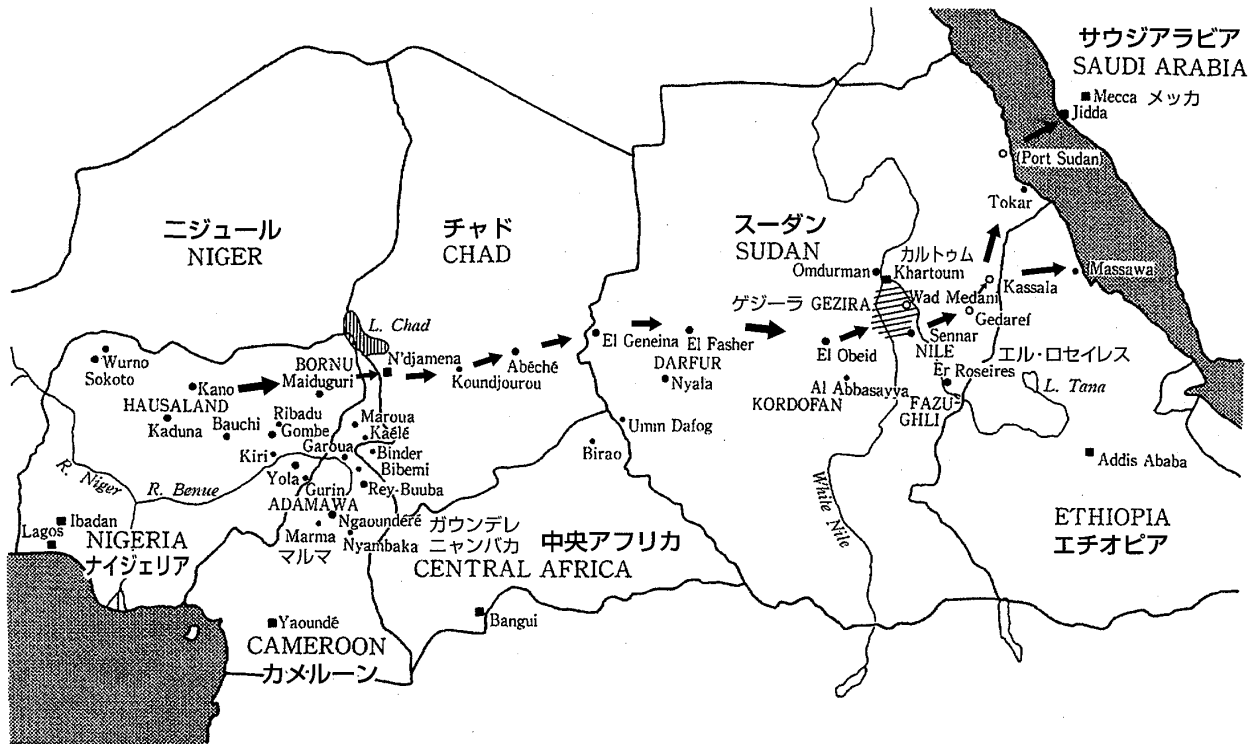
さて、先ほどもいったように、フェラータの人たちは、スーダンに来てウシを飼うわけです。けれども、イギリス植民地政府はかれらがウシを飼うことを好まず、エル・ロセイレスのまちの中で飼うことを禁止します。その時に、ウシと一緒に、エル・ロセイレスの郊外に移り住んだ人や、新天地を求めて新しいむらを作った人たちもたくさんいます。そういうむらがブルーナイルには何十かあります。いくつかはたずねましたが、西アフリカと同じに、ウシを飼う一方、ナイル川の氾濫原や河畔にモロコシを作っていました。ともかく、まちなかでもできればウシを何頭か持つ。さっきの靴直しのおじいちゃんでも、ウシを4頭持っている、わたしが行くと喜んで、自分で作ったチーズやヨーグルトを食べさせてくれました。

そういう、ウシを捨てられないフルベが、エル・ロセイレス周辺、つまりブルーナイルに集まり、そんなものには関心のないハウサは、商業や農業をこころざすわけですね。

フルベというのはおもしろい民族で、セネガルで記録に現れるのが、10世紀か11世紀で、そこに



資料5 アフリカにおけるフルベの分布(松下周二の調査による)



資料6 フェラータの移動図

今でもいるのです。わたしも行ってみたけど、今もいっぱいフルベがいるんですね。セネガル北部のフタトロというところにもいるし、ギニアのフタ・ジャロン (Futa Jallon) というところにもたくさんいる (資料5)。もちろん、北ナイジェリアやカメルーンにもいます。そして、スーダンのブルーナイルまで来ているわけです。

11世紀ころから、フルベはウシとともに動き始めるんです。だいたい、東へ向かって行く。そういうことがなぜ可能だったのかというと、西アフリカではウシを飼う牧畜民はフルベしかいなかったんです。東アフリカだったらいっぱいいますから、ウシを連れて移動したら、すぐにウシ泥棒にやられちゃうんですけれど、西アフリカでは、他にウシ牧畜民がいなかったから、フルベはやられなかった。そこの農耕民ともいろいろな面で協力します。ウシの糞を肥料として提供し、収穫後はたけにうち捨てられた雑穀の茎をウシの飼料として、はたけもきれいになる。しかも、北へ行けば砂漠でしょう。南に行けば熱帯雨林でウシは飼えません。草を追っかけて動くとしたら、サバンナをずうっと東に行くしかない。西は海ですから、東へ行くしかない。それで、15、6世紀にはニジェール

川の湾曲部のトゥンブクトゥやジェンネ、17世紀にはハウサの土地である北ナイジェリア、そして18世紀くらいに、カメルーン。そのように、メッカへの巡礼ルートに沿って動いたわけです (資料6)。

フルベは、大きくふたつのグループに分かれます。クランとしては、一緒なのですが……。ひとつは、まちに住む非常に敬虔なイスラーム教徒の集団です。そして、そのまちの郊外のブッシュにウシを飼っている、「ウシ飼いフルベ」とか、「ボロロ」と呼ばれる、名目的にはイスラームにですけど、あんまり、まあ、それほど敬虔でもない人たち。まちのフルベの人たちはそのボロロにウシを預けて、そばにウシがないのに、自分は「ウシ飼いだ」という話は、以前しましたね<sup>1)</sup>。そんなかたちで、まちへフルベのイスラームの先生が移り住むと、その周りにウシ飼いのボロロがやってくる。また先生が東に移り住むと、ボロロが追いかけるようにやってくる。そういうかたちで動いたんです。それで、セネガルからスーダンまで約4000キロありますから、4000キロを1000年で動いたということは、1年に4キロ動いたということになりますよね。

でも、本当に都市的フルベが出現したのは、ハウサとの接触以後かもしれません。セネガルやニジェール大湾曲部では、ウシ牧畜民という色彩が濃厚です。ハウサは、おなじナイジェリアのヨルバ、イボとともに、アフリカでも珍しい独自の都市的な文化をつくり上げた部族ですから、かれらと一緒に、ハウサ・フルベ都市文化複合が形成されたのでしょう。ハウサの東となりで一時期権勢を誇ったカヌリの宮廷文化の影響も色濃いと思います。北カメルーンのカウンデレや、ガルア、マルアは、その都市文化複合のフロンティアに当たります。

かれらにはもうひとつ、自分たちが東に行く理由が、口頭伝承の中にもあるんです。昔、メッカで、ムハンマド（マホメット）の弟子だったある1人の男が、ムハンマドに言われたといいます。「おまえはこれから西へ行って、イスラーム教を広めよ。そこの人たちは、新しい言葉を喋るから」と。「その言葉では、杖のことをサウルという」というような話をした。そこで、その人は西へ来てイスラーム教を広め、そこで結婚して、2人の子どもができた。ところが、その1人の女の子が、生来言葉が喋れなかった。そして、その時に「おまえが行って、そこでおまえがその言葉を聞いたころにわたしは死ぬ」と、始祖ムハンマドが予言していたという。それで、そのお父さんが出掛けている時に、その子どもが突然、言葉を喋りだすようになった。それがフルベ語だった。それを聞いたお父さんは、びっくりすると同時に、「ああ、自分の師が死ぬんだ」というので、家族を捨てて一目散にメッカに帰った。帰ったんだけど、すでにムハンマドは死んでいた。そして、その父はそれっきり帰って来ない。だから、われわれの子孫は、お父さんを求めて東へ進むんだという伝承があるんですね。

#### フルベ文化を捨てないフェラータ

先にも言ったように、フルベたちはエル・ロセイレスまでやって来て、そこで、かれらの住む場所周辺のウシを飼っていたわけです。そうしたら、1940年代になって、西から、フルベのウシが、ボロロに率いられて移住してきたとい

うのです。そして、ブルーナイルに到達したんだそうです。みんな喜んで、もう「こんなうれしいことがあるか」って言って。フルベのウシはチョコレート色で、コブが大きくて、ツノも大きい立派なウシなんだけれどね。

ともかく、この地に、フルベのウシが着いたというわけ。それで、みんなそのウシを飼いたがったのです。ところが、じつは、このウシはエル・ロセイレスでは雨期にしか飼えない。草をものすごく必要とするので、乾期には、ブルーナイルのずっと南へ行かないと飼えない。ということで、そのウシはけっきょく、トランスヒューマンスができるボロロが持っているんです。ボロロは、雨季にはエル・ロセイレスのあたりにやって来て、ミルクを売っているんですけども、乾季になると、200キロほど南のヤブス川のそばへ行って、そこで草を食わせて乾季を過ごして、また雨季が近くなると200キロ戻ってくるというトランスヒューマンスをする。

富川さんは、そのウシ飼いを、ヤブス川のふちまで追っかけていきました。スーダンでのわたしのパートナーだったガダルマリの助けで、車を借りて、手に入りにくいガソリンを手配して、ガダルマリも連れて出かけました。1週間の旅は、富川さんには、たいへん過酷な旅だったようで、口もきけないくらい疲れて帰ってきました。それで、あとで身体を壊しちゃったんです。わたしは連れて行ってもらえなかったけれどね。

そんなわけで、エル・ロセイレスのフルベは、もちろん、そのウシを自分で飼うことはできない。西アフリカの都市の人びとと同じですね、そういう点では。だけど、そのウシにはものすごく価値が置かれている。エル・ロセイレス郊外で、ウシ市が週に1回あるんだけど、そこにフルベのウシが出品されると、他のあらゆるウシを放っておいて、そのフルベのウシのセリをまずやって、それが全部終わらないと他のウシの売買が始まらないというくらい、ウシの博労みたいなのがみんな興奮するんだという話もあるんです。また、そのボロロの女たちがひょうたんに入れたヨーグルトを、エル・ロセイレスに売りに来るんですが、まちのフル

べの収入からするとけっこう高いのですが、もう、引っ張りだこで、すぐに売れてしまいます。夕方には、まちはずれのウシ飼いが、牛乳を量り売りします。みんなビンを持って買いに出かけます。わたしもよく行きました。

このように、けっきょく、スーダンまで来ても、フルベはウシを捨てられないでいる。子どもたちも、何をして遊ぶかという、切ると白いミルクのような汁が出てくる木の実をウシに見立てて、ウシ飼いごっこをする。柵を作って、「これは俺の雄ウシだ」とか、「これは俺の雌ウシだ」とか、隣の子と「このウシとこのウシを交換しよう」とかいて。この遊びは、わたしは西アフリカでは見たことないんですけど、スーダンでは、男の子たちにとって非常に楽しい遊びなんですね。敬虔なイスラーム教徒として、西アフリカからスーダンにやって来たフェラータも、やっぱりフルベ文化は捨てていない、それが今でも色濃く残っているということがわかって、すごく楽しかったんです（資料7）。

#### 「フルベの統一性と多様性」シンポジウム

1989年に民博で、セネガルのフルベを研究している人から、スーダンのフルベを研究している人まで、世界中から十何人の研究者が集まって、「フルベの統一性と多様性 (Unity and Diversity of a People: The Search for Fulbe Identity)」というシンポジウムをやりました。これは、江口一久、富川盛道、小川了、それからわたしなどの日本の研究者に、ナイジェリア、アメリカ、イギリス、それからイスラエル



資料7 ウシ遊びをするフルベの子供たち

からも研究者が集まったシンポジウムでした。

わたしはそこで、ガウンデレとエル・ロセイレスのフルベを比較して報告し、論文も書きました<sup>2)</sup>。書いたことは、その共通点、どういうところが似ているか、たとえば肉体労働はやらないとか、プラーク意識を持っているとか、ウシが生活に大きな意味を持っているとか、そういうようなことをいろいろと。

おもしろかったのは、外国の研究者は「わたしはナイジェリアのフルベしか見ていません」、「わたしはセネガルのフルベをやっています」、「わたしのフィールドはスーダンです」というんですね。ところが、わたしはカメルーンとスーダンを知っている。江口さんはカメルーンとセネガルやトーゴを知っている。それから、小川了さんもセネガルとスーダンを知っている。富川さんも含めて、日本の研究者は2ヶ所以上のフルベ社会を知っている。わたしなんかは、ほとんど全部、通して見ているわけですね。いい仕事をしているのですが、そういう比較のフィールドをもった研究者は外国には少ない。そういうことで、非常におもしろいシンポジウムでした。この報告書も出版されています (Unity and Diversity of a People: The Search for Fulbe Identity: Senri Ethnological Studies No.35.National Museum of Ethnology, 1991)。

#### 「アフリカにおける都市化の総合比較調査」プロジェクト

スーダンの仕事はいちおう、84年くらいで終わって、その後、わたしは研究代表者として、86年に「アフリカにおける都市化の総合比較調査」という科研プロジェクトを立ち上げて、もう一度東アフリカに戻りました。はじめて、わたし自身が研究代表者として組織したアフリカ都市調査のグループがスタートしたのです。

そのときに、わたしは予備調査で、アフリカの西端、セネガルのダカールから汽車に乗って、マリの首都のバマコに行って、バマコからニジェール河湾曲部の古都トウブクトウやジェンネまでバスや乗合船で行って、そのあと、マリからコートジボワールに入ってアビジャンに行き、ナイジェリアの北部のまちをずうっとまわって、はじ

めて、西アフリカの主要な都市の多くを見ることができました。東アフリカの都市と西アフリカの都市の比較ということが、見えてきたというか。それが、わたしのライフワークということになってくるんですけど。

このプロジェクトには、松田素二さんや、上田将さん・富士子さん夫妻、赤阪賢さんらが加わりました。それから、嶋田義仁さんと、AA研にいた松下周二さん、それに、第3部で紹介したカメルーンのエルドゥリッジ・ムハンマドさんも加わりました。このかたはこのあいだ日本にはじめてこられて、ご帰国後に突然亡くなりました。フルベをはじめ、カメルーンのおおくの民族の口頭伝承の資料を集めた世界的な歴史学者で、わたしがいたAA研からも十いくつの著書が出版されています。

わたしはこのプロジェクトに、東アフリカをやっていた上田さん夫妻や松田素二さんには、西アフリカを見てほしい、西アフリカをやっていた赤阪賢さんには、東アフリカを見てほしいという計画を盛り込みました。おそらく、上田さんたちにとって、西アフリカに行った経験はこのときだけだと思う。だけど、西アフリカをかなり広く、3ヶ所か4ヶ所は歩いてみたはずです。上田さんたちは、マリと、あとどこに行ったのかな。松田さんは、ハウサのほうに行ったのかな。わたしは「金や時間はかざられますが、あとは、どうぞご自由に歩いてください」という方法でしたから。

わたしは、タンザニアのザンジバル (Zanzibar Island) で、スワヒリの中心部のいろんなことを調べたいと考えていました。ただ、ここでは比較の視野で観察しただけで、あんまりきちんとした調査をしていません。

### ザンジバルとクローブ生産

ザンジバルってところは、タンザニア沿岸部から数十キロ離れた島で、19世紀はじめにアラブのスルタン国、イスラーム国の首都になったまちがあるんです。15世紀以来ポルトガルがずっと支配していたんですが、19世紀のはじめにそのポルトガルを追い出す戦いが起こって、そのひとつがケニアのモンバサにいた、ア

ル・マズルイというイスラームのチーフ。今、その子孫がロンドン大学の歴史学の教授をしていますけれど、その人がポルトガル勢力に反乱を起こして、その結果ペンバ島を支配下に入れて、そこでちょっとあこぎな植民地政策みたいなのをやったらしいのです。

その後、今度は、アラビア半島のオマーンの人であったサイド・サイドという人が南下してきて、アル・マズルイもつぶされ、ポルトガルも追い出して、ペンバとザンジバルを中心に、インド洋沿岸の非常に狭い地域にブサイド一族 (オマーン・アラブの支配者) が支配するひとつの国を作りました。ペンバという島は、アル・マズルイの圧政もあって、オマーン・アラブによって、むしろ解放されたという局面があるのです。

このザンジバルが導入したのが、クローブ生産です。クローブは、東南アジアのモルッカ諸島が原産で、コモロ島のヨーロッパ人から、アラブ人に伝えられたようです。クローブはもちろんザンジバル島でもできますが、最も適したのがペンバ島です。そこで、ペンバ島をあげて、クローブのプランテーションをやる。一時期は、世界のクローブの80%も独占することになるのです。最初はドレイを使ってやっていたけれども、植民地体制下でドレイ制が廃止され、出稼ぎ労働者が大陸部からやってきて、クローブの収穫に従事する。大規模なアラブ人やインド人の農園ではそういう労働者を使いますが、ペンバの人たちは自分でクローブのプランテーションを持ち、わずかの労働者の助けを借りて、1人で20本くらいの木を持っていたら、それでもう左団扇で暮らせるというような状況だったんですね。

### タンザニア連合共和国の誕生

そして、アフリカの国々が独立することになって、1960年代になって、ザンジバルも独立しようということになるわけです。そこで、アフリカの多くの植民地でやられたのが、制憲会議。独立後の、憲法を作る会議。このザンジバルでもそういうことになります。憲法を作るっていうのは、選挙で国会の前身みたいなものを選んで、そこで憲法



をきめる審議をするわけです。

その時に、ザンジバルでは、3つの政党が選挙に参加しました。そのひとつが、ザンジバル・ナショナル・パーティ（ZNP）。これは、アラブ人が中心で、エジプトのナセルのいわゆるアラブ民族運動に乗かってできた政党です。それからペンバ・ピープルズ・パーティ（PPP）。ペンバ島の人たちが主になって作ったアラブよりの政党ですね。それからASPというのは、アフロ・シラージ・パーティ。これは、本土からきたアフリカ人と、シラージ意識を持った地元のスワヒリの人びとが作った政党です。シラージというのは、ザンジバルの人たちの多くが自分たちの祖先はペルシャ、イランのシラージ地方（Shiraz）から来ているという。それで、自分たちは「シラージだ」、「われわれの祖先はシラージだ」という意識の人たちと、それから主に本土の方からやってきたアフリカ人たちが作ったパーティ。3つの政党ができるわけです。

それで、この3つの政党で、選挙を争うことになりました。ところが、アラブに好意を持っているペンバ島のPPPはクローブのプランテーションを持っている人が多く、ZNPと手を結び、ASPに対抗したわけですね。そして、選挙を3回やったんですが、最後の選挙では、ASPが過半数の票数を取ったのに、選ばれた人は、ZNPとPPPを足すと過半数になっちゃうというような矛盾が起きました。でも、イギリス植民地政府の意向もあって、けっきょく、ZNPを中心とした、スルタンを持った王国ができたんです。それが1963年の12月のことですけれど、64年の1月には、もう革命が起こって、スルタンをはじめ、アラブ人の多くが追い出されてしまう。

そして、ASPが、中国などと手を結んで社会主義の国を作った。そのころ、タンザニアの本土（タンガニーカ）の方は、ニエレレを中心にした社会主義の国ができていた。そのふたつが一緒になってつくったのが、タンザニアという国です。それまでは、ザンジバルとタンガニーカとっていただんです。そのタンガニーカのタンと、ザンジバルのザを取って、それに

この地域をアザニアって昔呼ばれたらしいんで、そのアザニアを付けて、タンザニアっていう国を作った。そして、1964年の4月には、ユナイテッド・リパブリック・オブ・タンザニア（タンザニア連合共和国）という国ができるんです。

タンザニアは、だから、もともとふたつの国だったので、今も1国2政府システムです。学生を連れて行ったときも、ザンジバルにつくと、全員パスポートをもう一度出して、入国のハンコを押してもらわなければならない。それから、わたしなんかはタンザニア政府の調査許可が下りても、ザンジバルに行ったら、「そんなのダメだ」というわけで、もう一度ザンジバルの調査局で調査許可をもらわないとならない。基本的には、大統領は本土の方の大統領。そして第1副大統領はザンジバルの大統領。第2副大統領は本土から選びます。タンザニアにもザンジバルにも内閣があって、首相、外務大臣がいる。そういうこともその憲法の中できめられているんですね。

ともかく、ザンジバルでは革命が起きて、ASPが天下を取り、中国と結んだ社会主義の独裁国家になりました。その時にいちばん先にやったのが、クローブのプランテーションの国有化です。そして、密輸貿易をきびしく禁止した。そうして、プランテーションの利益を、ほとんど国が押さえてしまったんです。

このときに目の敵にされたのが、アラブ人と、もうひとつがアラブ人とむすんでPPPに対抗したペンバの人たち。ペンバがアラブ人とむすんだため、自分たちの目指す国ができなかったということがあるわけです。それでペンバのプランテーションを国有化して、全部取り上げ、「われわれのネイティブな食事はキャッサバなんだ。われわれはみんなネイティブな食事に戻るんだ」といって、ペンバの人たちが主食にしていた米を食うことを禁止する。それで、ペンバの人たちは米を食べられなくなって、キャッサバしか食べなくなる。生活の元であったプランテーションを取り上げられて、多くの人が難民化する。難民化してどこへ行ったかということ、ザンジバルのまちへ来る。当時、

ザンジバルの市街は、アラブ人やインド人が逃げた。そこへみんな不法に移り住んだんです。今でもおおくが住んでいます。

それから、もうひとつ、ASPは、ザンジバルの中の下宿屋やホテルを全部国有化しました。それで、それぞれの経営者に「カギを全部出せ」と取り上げて、カギの山ができたんだって。ところが、どのカギがどこのホテルの、どの部屋のカギかということが全然わかんなくなっちゃって、けっきょくたいへんなことになったみたいだけれども……。まあ、そんなこともあって、ともかく社会主義でいくわけです。

### タンガニーカの宗主国・ドイツ

話は前後しますが、19世紀の末になって、植民地争奪戦になった時に、ドイツは乗り遅れたんですね。それで、普仏戦争に勝って力がついたところに、ドイツもアフリカに植民地を持ちたいというので、ザンジバルのスルタンのところに行って、「大陸部の方を譲ってくれ」といったのです。そして、幾らかの金を出したと思うんですけども、そのころは、イギリスはケニアをしっかりと自分のものにしようと思って植民地化を始めて、フランスはマダガスカルを押さえていて、両方とも、むしろここにドイツを認めてやった方が自分たちも植民地を作りやすいということで、ドイツを後押しした。で、けっきょく、19世紀末期にベルリンで開かれた国際会議の植民地分割で、ドイツはタンガニーカの領有が認められ、タンガニーカ、当時の呼び名は「ドイツ領東アフリカ」というんですが、タンガニーカ湖の周辺、今のルワンダ、ブルンジまでを含んだ地域がドイツの領土になったわけです。その時期には、もうドレイ交易は禁止されていたし、ウジジを通る、いわゆる交易ルートも衰退して、そのルートに沿ってドイツが鉄道を作った。ウジジを迂回して、キゴマまで、というのは、第2部でお話しました<sup>3)</sup>。

余談ですが、そのとき、ドイツが支配下におさめたアフリカの国が4つあるのです。タンザニアと、カメルーンと、ナミビア、それからトーゴ。この4つの国には共通点があるんです。ビールが

うまい。それはやっぱり、ドイツがもちこんだのだと思います。青島と同じですね。植民地支配には、そういう宗主国の影が見えます。旧仏領はファッションブルでパンがおいしいとか、旧英領はフィッシュ&チップスばかりで食べ物がまずいとか、いろいろあります。

その後、ドイツは第1次世界大戦で負けて、タンガニーカはイギリスの、国際連盟の信託統治になりました。だから、実質的にはイギリスの植民地になったということですね。

ドイツというのはおもしろい国でね、フランスは自分の植民地は全部フランス語を公用語にしまい、イギリスも、英語を公用語にしました。けれども、ドイツはどうしたかという、タンガニーカでは各部族のチーフやその子弟を集めてスワヒリ語学校を開いたんです。つまり、ドイツ語より、スワヒリ語を教えました。

もちろん、10数年で追われたわけですから、ドイツの実質的な支配が短かったこともありませう。だけど、ともかく積極的にドイツ語は教えなかった。だから、ほかのほとんどの国は、公用語が英語だったり、フランス語だったり、ポルトガル語だったりするんですけども、タンザニアだけは公用語がスワヒリ語です。ドイツ語の単語も、スワヒリ語にはほとんど取り入れていない。ひとつあげればシューレ (Schule)、学校です。ドイツの植民地に入らなかったザンジバルでは、英語からのスクリ (School) が使われています。

しかも、教育語のスワヒリ語で読み書きもする。正書法が確立したハウサ語はともかく、フルベ語なんかは、いちおう聖書などで文字化されてはいるけど、ほとんど普及していない。おもしろいのは、フルベの人が、江口一久さんの書いたフルベ語の本を見ても、うまく読めない。むしろ、対訳になっているフランス語の方を読んでいるという感じなんですね。そんな、ローマ字化されている自分の言葉なんか考えたこともないでしょう？ ところが、タンザニアだけは、スワヒリ語が、17世紀にはアラビア文字で、19世紀にはローマ字で文字化されていて、それで読み書きができる。いわゆる識字率も、他の国ではフランス語や英語が書けるとい

うのが識字ですけど、タンザニアでは、自分のしゃべっている言葉が書けるといのが識字率ですから、学校教育や社会教育が普及すると、識字率が一気に90何%かになってしまいます。だから、ザンジバルやダレサラームでは、何十種類ものスワヒリ語の新聞が売れるわけです。

### ネイティブの文化とスワヒリ文化

タンザニアはやっぱりスワヒリ文化が一度は国をおおっているの、スワヒリ文化を基底とした共通の国民文化というものもできるわけです。だから、わたしが調査地として、中心のザンジバルやインド洋沿岸部ではなく、フロンティアのウジジを最初に選んだというのは、スワヒリ文化の地域的、時間的な構造を理解するとき、あるいは、タンザニアという国を考えると、自分自身でも、非常にいいところをついたなと思っています。

「アフリカの庶民にとって国家とは何か」という、ウジジの人たちの国民社会との関わりを考えた論文は、鈴木榮太郎先生の『国民社会学原理』を下敷きにして書きました<sup>4)</sup>。

1968年に書いた「東アフリカにおけるスワヒリについて」<sup>5)</sup>という論文は、ウジジのフィールドワークのデータと、ダレサラームなどの滞在経験とスワヒリ研究の先行研究の検討で仮説的に書いたものです。そのころは社会主義下で、スワヒリ文化の中心であるザンジバルへ行く機会が与えられなかったなかで、スワヒリ文化のもうひとつの中心であるケニアのラムという島での知見を加えてリファインしたいくつかの論文もあります。

そのひとつでは、それぞれのネイティブの文化がスワヒリ文化とぶつかった時に、どういうことが起こるかを考察しました。ある部族社会にスワヒリ文化が入ってきた時に、いちばん最初に起こることは、その人たちがスワヒリ語とその部族語の両方をしゃべるようになることです。バイリンガルになるわけです。その次には、今まで丸かった伝統的な家をイスラーム風の四角い家にする。家では昔の伝統的な服装だけど、まちへ行くときにはイスラームの格好をしていくとか、草履に代わってサンダルを履く

ようになる。それから、今までウガリというねりがゆを食べていたのが、イスラームの祝日などに沿岸部のスワヒリが主食とするお米のご飯も食べるようになる。つまり、スワヒリの外的側面が取り入れられる。そのうちに、都市文化と接触してムスリムに改宗する人がふえて、その人たちが都市へ出て来る。こういうように、スワヒリ文化とネイティブの文化がぶつかったときに起きる変化について書きました<sup>6)</sup>。

この論文をさらに発展させた論文もあります。スワヒリ文化と植民地文化の接触の場面でも、同じことが言えるのではないか。スワヒリ文化の入ったところに植民地文化が入ってくると、部族語とスワヒリ語と英語、3つをしゃべるようになる。そして、イスラームの服の上に背広のコートを着たり、草履やサンダルが靴になったり、靴下を履いたり……。それから、お米のご飯だけじゃなくて、パンやドーナツを食べるようになる。家でもわらぶき屋根がトタン屋根に変わったり、家の中にも西洋風の戸棚が入り、ドアや窓が西洋風、植民地風になってくるといような変化が起こる。そして、その次には、キリスト教に改宗するということが起こってくる。だけど、必ずしもイスラーム教徒が全部キリスト教徒になるのじゃなくて、場合によっては、イスラーム教徒ではあるんだけど、いわゆる西洋的な価値体系を身につけた人があらわれてきて、そういう人が都会へ出てきて、背広、ネクタイの現代的な市民になるというようなことになるわけですね。さらに、タンザニアの国民文化の形成について考えると、そのような西欧化のプロセスを経たスワヒリ文化が基層になって、形成されていったのだということになります。実際、国民文化が権力を持って国の内陸部に拡大していくときには、国語となったスワヒリ語の部族社会への普及、スワヒリ語の識字教育、おおくの場面が、スワヒリ化とおなじ過程をたどるわけです。そういうように、部族社会の文化、スワヒリ文化、植民地文化が一緒くたになって接触を重ねたことで、タンザニアという国の国民社会、国民文化ができあがったということを書いた論文です<sup>7)</sup>。この論文では、ザンジバルの観察調査の成果

が、わたしの思考の大きな材料になったのです。

### スワヒリ文化の先進地・ザンジバル

こういったことが、なぜ東アフリカではっきり出てくるのかというと、東アフリカでは、まずスワヒリ文化が海岸からひろがったでしょう。それから、植民地文化も海岸からひろがった。ひろがった方向が同方向ですね。だから、重層化して、そういうことが見える。ところが、西アフリカでは、カメルーンもそうですが、イスラーム文化は北のサハラ砂漠を通過して来たけれど、植民地文化は南の大西洋沿岸部から来た。方向が反対なんです。だから、現れ方がちがうんですね。そのへんは、和崎春日さんのフンバンというまちのバムンの調査のデータなんかを読むと、よくわかるんです。王様がムスリムになったり、キリスト教徒になったり、それらを一緒くたにした宗教を作ろうとしたりというような話が起ってくる。ところが、東アフリカでは、ザンジバルは、スワヒリ文化の先進地域であると同時に、西洋文化の先進地域でもあるんです。だから、ザンジバルでは、スワヒリ語の他に英語も流暢にしゃべるっていう老人もけっこう多いんです。また、食生活や住居を見ても、本土よりもより西歐的な色彩が見られます。

でも、ザンジバルのスワヒリ語は、なかなか隠微で、やはり歴史の重みが加わっています。あるときザンジバルで、ある老人にいわれました。「おまえはなかなか上手にスワヒリ語を話す。だが、まだダニ（内）のスワヒリ語には到達していない。たとえば「窓」のことをなんというか。Dirishaというだろう、だが、窓には、出窓、壁に付けた通風用の窓、天井近くにつけた明かり取りの窓、いろいろな窓があって、それぞれ名前があるのさ。それが、内のスワヒリ語 (kiiswahili cha ndani) なのさ」。内陸で、もっともはじめにスワヒリ語が共通語になったウジジでも、こういうスワヒリ語は、少なくとも一般のウジジの人びとには入っていません。そういうスワヒリ文化をのりものにするスワヒリ語がザンジバルには存在しているこ

とが、平然とザンジバルの老人の口で語られたのでした。ザンジバルの別のある貧しい老人は、若いときから食べたスワヒリ料理のレシピを、夜ごと、コーヒーショップで、自分で口にヨダレをにじませながらかたってくれました。すべてとはもちろんいいませんが、やはり、スワヒリ文化の基層的な部分の多くは、ザンジバルで学びました。

もうひとつは、わたし自身が老境に達してはじめて、同世代の人びとが、インフォーマントというよりは、よい友人として友好を深めてくれたともいえるでしょう。若いときは体力や、気力もあり、いい仕事も出来るのですが、老境に入ったら入ったなりに、楽しくフィールドワークができるのです。昔、フィールドワークの先駆者であった、今は亡き大野盛雄さんが、「本当のフィールドワークは、50歳を過ぎて、はじめてできるのです」と常々言っておられたのを思い出しました。こうして、ザンジバルは、ウジジ、バングブーム、ガウンデレ、エル・ロセイレスと並んで、わたしのこころのふるさとになりました。

### ケニアのスワヒリ語

スワヒリ語にはいっぱい方言があるんです。ザンジバルの中だけでも、ザンジバル方言、ペンバ方言、トゥンバトゥ方言、それからモンバサ周辺のキヴィタ方言、それからラム辺りのキアム、それから南の方のキルワ方言と、地域ごとに方言がある。さらに、ソマリアのモガディシュ方言。それから、コモロ島方言。全部、少しずつ違うんです。そして、内陸部では、ケニア中心のアップカントリー・スワヒリ、コンゴ東部で話されているコンゴ・スワヒリなどもあります。

ケニアもタンザニアと同じくスワヒリ語が全国で通用することになっています。でも、実際は全土というわけにはいかないようです。沿岸部でイスラームの政党をとったかたちで、いわば、地方化というか、地域文化化にとどまります。首都ナイロビで沿岸部の標準スワヒリで話すと、「なんだ、おまえは沿岸からきたのか」と、場合によっては、軽蔑の対象になると

いうことさえあります。あんまり標準スワヒリ語は話されなくて、いわゆるアップカントリー・スワヒリという、内陸部で発達したスワヒリ語方言が、共通語になっています。それ自身は立派な共通語で、時代とともに内面化され、立派な現代語に発展していってますが……。

イギリス植民地になってから、どういうスワヒリ語を標準語にするのかということで、そのころのイギリス植民地3国、ケニア、タンザニア、それからウガンダの、3つの植民地を対象にしているヨーロッパの研究者が集まって、東アフリカスワヒリコミティーという会議が開かれ、そこでザンジバルのスワヒリ語を標準語にしようときめられたんです。たくさんある方言の中から、ザンジバル方言を標準語にしようということになったのは、ひとつには、ザンジバル方言だけはすでに文字化されていたんですね。17世紀にアラビア文字で書くことがはじまり、それがさらに、イギリス植民地のザンジバルや、本土でもドイツ植民地時代のはじめぐらいにローマニズされたということで、正書法があるんですね。正書法がある言葉を標準語にしようということになった。だから、ザンジバルの方言が標準語になったわけです。

だけど、それに対してケニアのモンバサの人なんかは反対する。「ザンジバルの方言なんかピジンスワヒリで、われわれの言葉の方がまっとうだ」とか、そういうことを書いた本もあるんですけれどね、実際に。

ケニアはね、またおもしろいんです。わたしなんかはウジジでスワヒリ語を習ったんだけど、これは標準語に近い。だから、ナイロビなんかでわたしがスワヒリ語をしゃべると、さっきいったように、「おまえ、海岸から来ただろう。海岸でスワヒリ語を習っただろう」といわれる。ナイロビあたりのスワヒリ語は、たとえば、スワヒリ語に当たり前のようにあるクラス分けなんかはかなり曖昧になっています。だけどまた、それがすごい立派な言語っていうか、みんな、アップカントリー・スワヒリで、ものすごく早口でしゃべっている。松田素二さんなんかはそっちのほうが上手です。

わたしのスワヒリ語は、タンザニアでは「お

まえ、海岸から来たか」とかいわれて、敬意を持たれるというか、ほめ言葉になる。それが、ケニアのナイロビで「海岸から来たのか」といわれるときには、馬鹿にされているんですね。

#### YAAとアフリカ現代都市文化研究会

1970年代の後半くらいから、2ヶ月に1ぺんくらい、若い研究者や大学院クラスの人にその研究を発表してもらって、みんなで勉強しようという研究会を、東京外大のAA研にいるときに作りました。YAA、つまり、ヤング・アンソロポロジスト・アソシエーションで、かつ、ヤング・アフリカニスト・アソシエーション、そして、ヤング・アルコールック（酒飲み）・アソシエーションだと、わたしは知っているんですが……。

このYAAは、1978年くらいから80年代の後半ぐらいまで、10年近くやりました。杉本星子さんにも、ここで発表してもらいました。杉本さんは、マダガスカルをやっていたんですね。マダガスカルをやっている人が2人いて、杉本さんは南山大学で、もう1人は深澤秀夫さん、一橋大学だったかな。その2人を呼んで一緒にしゃべってもらいました。その後、深澤さんは、マダガスカルに行ったんです。船で1ヶ月かけて行って、3ヶ月して船でまた帰ってくるという予定だったんだけど、マダガスカル大学で「うちの大学に入らないか」といわれて、そのまま5年いた。その深澤さんは今、AA研にいます。そのとき一緒に発表したのが杉本さん。まだ中島星子さんでした。彼女は、今民博にいる杉本良男さんと結婚してインドへ行っちゃったけどね。また、マダガスカルやインド洋上の島々に回帰しているようですが。

このYAAには、AA研の仲間と一緒に、和崎春日さんもよく来ていたし、阿久津昌三さん、栗本英世さん、それから、今中近東文化センターにいる川床睦夫さんとか、とにかく、1年に5~6人が発表していました。日本文化人類学会の名簿を調べたら、おそらく、20人ぐらいYAAでしゃべったことがある人がいると思います。

このYAAは、わたしがAA研を辞めるころ

になって、ちょっと形が変わって、アフリカ現代都市文化研究会という形になりました。これは今でも続いています。このあいだその集まりがあって、19回とかいっていましたね。

このグループも、最初はAA研で立ち上げたんですが、メンバーの半分が関西、東京に3分の1、残りが全国に散らばっているという感じでした。それで、わたしが京都文教大学に移ったことで、関西中心になって、会場は京都文教大学か、京都大学か、民博。わたしが退職してからは、和崎春日さん、嶋田義仁さんがいる名古屋大学というようなかたちで続いています。

### ダレスサラームの都市文化研究

その研究会と並行して、98年から2年間、トヨタ財団からお金をもらって、ダレスサラームの都市文化研究をしました。これはまだ、わたしは報告書も何も書いていませんが、共同研究のメンバーは、いろんなところに論文を書いています。

このグループでおもしろかったのは、ダレスサラームのいちばんの繁華街というか、アフリカ人タウン、カリアコーというところを、ずうっとビデオで撮ったわけ。20何時間分、通りをずうっとビデオで撮ってゆく。それを20分くらいに編集したのが、わたしのところにもありますけどね。

じつはこのあと、たいへんな事件が起きちゃったんです。その撮影は無事終わったんだけど、その時にいちばん協力してくれた、カリアコーに住んでいるすてきなおばちゃんが1人いるんだけど、そのおばちゃんと、われわれのメンバーの1人である檜垣マリさん、スワヒリの伝統的なターラブ音楽の研究をしている人で、その2人が、そのカリアコーを夜歩いていて強盗に襲われて、手をパンガという刃物で殴られて、2人とも大怪我をしたんです。それで、檜垣さんは日本へ帰ってきて手術をしたんだけど、もう1人の向こうのおばちゃんが、なかなか手が治らないで、けっきょく、われわれがみんなで少しずつお金を出し合って、日本で再手術をしたの。右手かな、まあ完全には戻らないけれども、かなり改善して送り

帰したという、そういうこともありました。

この調査では、中心になったのは鶴田格さんと、それから小林直明さん、黒田真さん、それから檜垣マリさん、そういう人たちが加わって、ダレスサラーム大学の学生と協力しながらやりました。

### アフリカ都市研究の後継者たち

日本におけるアフリカの人類学的研究の、いちばんの伝統は人類生態学、エコロジーでしょう。今西錦司先生、河合雅雄さん、伊谷純一郎さんからはじまって、サルだけじゃなく、田中二郎さん、太田至さん、佐藤俊さんたち、いわゆる人類生態学的な研究が伝統になっていて、今でも研究者が何人もいます。だいたい、ご本人の伊谷さんが、ケニアのトゥルカナのいい調査をなさっています。それよりはちょっと遅れたけれども、都市研究も、日本におけるアフリカの人類学的研究のひとつの特徴になったんじゃないかと、わたしは思います。

1986年にわたしが「アフリカにおける都市化の総合比較調査」を立ち上げた科研プロジェクトの共同研究会の、最初のメンバーは7~8人でした。和崎春日さんのお父さんの和崎洋一さんとか、米山俊直さんたち大御所から、上田将・富士子さん夫妻、そして、赤阪賢さん、松田素二さんなど当時の新進気鋭の面々が若手でした。それが、1996年にわたしがAA研をやめるときの、そのプロジェクトの最後の年のメンバーは36人いるんです。8年間に約5倍に増えている。そして、そのなかでもとくに若い人たちが、いろんなことをやり始めています。

考えてみると、われわれのころの、初期のアフリカのフィールド研究は、よくいえば博物的というか、見るもの全部がうれしく、わるくいえば、おおざっぱだったのかなと思います。だいたい、文化人類学を学校で正規に学んだのではない。わたしのよう社会学を出たり、赤阪賢さんや端信行さんのように人文地理学だったり、あるいは富川盛道さんは医学と心理学、米山俊直さんのように農業経済学、和崎洋一さんに至っては地球物理学。いろいろな分野からアフリカ研究にささり込んだ人たちでした。い

わば、研究対象物のおかげで文化人類学に出会った素人集団とでもいってよい人びとでした。

日本の今のアフリカ若手研究者たちも、その傾向はいくらかみられますね。でも知見とアイデアは格段に進歩していると思います。ただ精密で深いけれど、狭いというか……。そのかわりね、おもしろいこと、いろいろ見つけてきていますよ。初期の生活全体をみようというひろい民族誌よりも、先行研究をじゅうぶん踏まえて、現象をきちんととらえた深い問題意識といってもいいのかな。

東アフリカでは、たとえば、京大の小川さやかさんは、ムワンザの古着商の研究で、その古着がどこから来てどんな形で売られ、どんな販売システムで、それぞれの組織がどんな形で金の融通をしたりしているかっていう研究をやっています。それから、黒田真さんは、ムベアというタンザニア南部のまちから首都へ運ばれてきた野菜が、どんな人びとによって、どんなふうに売られているかとかね。鶴田格さんは、ダレスサラームのまちのサッカーのチームと音楽と政治という、その3つを結びつけて眺めていくと、それが非常に密接に結びついているという研究。小林直明さんは、いわゆる露天商、向こうでは「シティーホーカー (City Hawker)」といわれる、街角で古着を売ったりしている人たちの活動を追っかけています。石井美保さんは、ダレスサラームでのラストファリアン (エチオピアに信仰の対象を求める、カリブ海で発達した信仰、ポップ・マーリーらのレゲエ音楽で知られる) の研究から入って、ガーナの新興キリスト教の研究でいい仕事をしました。

カメルーンも、またこれおもしろい。亀井伸孝さんといって、アフリカの手話の研究をしている人がいます。カメルーンの手話っていうのがどうなるのかっていうのでね。アフリカ中の手話を調べて論文を書いています。

カメルーンはね、今では、日本人研究者があつまっています。ザイールでやっていた人、コンゴでやっていた人、それから、ナイジェリアでやっていた人が、内乱が起きてフィールドに行けなくなった。で、みんな治安が比較的安定

しているカメルーンに来ているんです。だから、日本人研究者が非常に多い。研究者難民収容所って、わたしは悪口言っているんですけども……。仮面の研究をしている、名古屋大学の佐々木重洋さん。それから、南の方では、いわゆるピグミーとか、そういうのを研究している京大の生態学研究者を中心にした人たちが十数人いますしね。

西カメルーン、カメルーン西部の王国の研究では野元美佐さんがいます。早稲田の修士の時にナイジェリアの首都ラゴスの研究で、わたしのところにやってきて、「修士論文を見てくれ」って言うんで、構想的にやや問題があったので、わたしがいくらかアドバイスしてかなりいい論文になったのだけれども、早稲田大学の社会学は、彼女を博士課程に入れてくれなかったのです。「こんなアフリカやるやつなんか面倒みられない」っていうんで、それで、「もう一度修士課程をやれ」ということになって、和崎さんのいる日本女子大の修士に入った。で、修士にいる間に、ナイジェリアのラゴスの調査をやりたいというので、何回かの調査の時に、研究協力者としてわたしが一緒に行って、ラゴスに彼女を置いて、そのあと、わたしはカメルーンへ行こうと思ってロンドンまで飛んだら、ナイジェリアでクーデターが起こって、外務省から渡航自粛が出た。渡航自粛が出たらもう、科研で行った場合入れませんので、相談して、「それじゃあ、わたしと一緒にカメルーンへ行くか」ってことになって。で、ロンドンからパリへもう一度飛びなおして、パリからカメルーンへ飛んだのです。で、彼女は、カメルーン的首都ヤウンデの、バミレケといわれる、ある意味でカメルーンの経済力を握っていて、地元資本家たちもたくさん出ている、そのグループをやろうということになりました。バミレケの人たちの相互扶助組織、とくにトンティンと呼ばれる、日本でいうと頼母子講、その制度を調べて、そしてさらにその人たちが出てきた故郷のバンガンデという所まで出かけて行って、その故郷との関わりを克明に調べて、そのあいに民博の大学院の博士課程に進学しました。そして、民博にいる間もフィールドワーク

に何回も行って、けっきょくカメルーンニストになっちゃった。ナイジェリアをやるはずだったのが……。いい仕事して、このあいだ書き上げた論文が、日本アフリカ学会奨励賞をもらいました。

わたしがアフリカに最初に行ったのは31歳のときなんですね。富川さんは38歳。梅棹さんや和崎さんは40代はじめ。今西先生なんかは60歳になってから行っているわけです。それに比べたら、福井勝義くんなんかは最初に行ったのが18歳ですからね。この差は大きいと思います。今西さんなんか、数年アフリカやっただけで定年でしょう。今の若い人は、20歳くらいですくいすい行っちゃうわけで、そういう点でいえば、わたしよりも10年くらい長く蓄積ができるはずですよ、続けていれば。

#### ダレスサラームとヤウンデでの経験

わたしが最初にアフリカに行ったのは、1ドル360円の時代で、タンザニアの1シリングが、日本円で60円か70円でした。たしか、アメリカ1ドルがタンザニアの7シリングだったから。それが今は、20銭ですからね。1ドル120円くらいでしょう。それで、タンザニアでは、昔は1ドルが7シリングだったのが、今は1ドルが1000シリングくらいになりますからね。そういう点でいうと、日本が金持ちになって、若い人でもアフリカへ行けるようになった。若いアフリカのフィールド研究者がふえた背景には、この円高、あるいはアフリカ諸国の経済危機があります。わたしが最初行ったところなんか、それこそ科研で行くんだってたいへんだっていうくらい貧乏でしたからね。けれども今は、ちょっとアルバイトしてお金を貯めれば行けるわけだから。

わたしが二度目にカメルーンに行ったとき(1971年)には、調査許可制度が変わっていて、1回目の調査許可は使えず、あらためて調査許可を取らねばならなくなり、その調査許可がなかなか取れず、長期間ヤウンデで足止めをくらいました。その間1ヶ月ほど、毎日ホテルに泊まるなんてわけにはいきませんので、カミさんと2人で首都ヤウンデのまちの中の部屋を

ひとつ借りて、そこで1ヶ月半位暮らしたんだけどね、おもしろかった。ものすごくおもしろかった。フランス語圏では庶民のまちはカルチェっていうんだけど、そこらの庶民の家の部屋を借りて、飯はランドゥミュ(L'an deux mille、つまり2000年)という名前のレストラン。ヤウンデ周辺を居住地とするエウオンドのジョセフさんがやってるレストランに毎日食べに行き、ハリネズミやカタツムリなど、いろいろなアフリカの食べものを経験しました。夜になると、地元のバーで遊ぶ。もちろん調査許可を取るために滞在しているのだけれど、それは、アフリカ都市研究の実地でのトレーニングでした。そのときは考えもしていなかったけれど、のちに野元さんが対象としたバミレケのふるさとのバーのひとつも、わたしの行きつけでした。このおばさんのバーでは、閉店後のバミレケの秘密の(?)集まりにも出席させてくれて、なかなか楽しかったです。ビールの空き箱に腰を下ろして、バミレケの言葉はできないから、若ものに、様子をききながらね。

それより前、1964年に、ダレスサラームにも、調査許可を取るために1ヶ月半いたことがありました<sup>8)</sup>。この時は1ベッド2シリング。そのころはまだ1シリング60円くらいですから、1泊120円くらい。ひとつの部屋の中にベッドが5つくらい置いてあって、そのベッドひとつを借りました。基本的な財産は全部日本人の商社の人家に預けて、シャワーを浴びさせてもらって、わたしはそこにほとんど着のみ着のまま、ちっちゃいバッグひとつくらいで泊まるという経験を1ヶ月半やったんです。そこでの相客とのおしゃべりはスワヒリ語のいい勉強になったし、ここで得られた情報は、わたしのアフリカ都市調査にとってはとても有益でした。早朝には、泊まり客のムスリムがベッド脇で朝のお祈りをはじめたり、当時内戦状態だったコンゴの亡命者と話ができたり、なんていうことにもでっくわしました。そのころはまだ治安が良くて、夜でも出歩くことができました。それこそ、のちに檜垣さんたちが強盗にあったキャリアコーも、食事に、ビール飲みに、日参してました。



この、ダレスサラムとヤウンデというふたつのまちで、それぞれ1ヶ月あまり暮らしたことが、わたしにとって、アフリカ都市経験としては、ウジジの調査と同じくらい意味がありましたね。やっぱり後から考えると、いい経験だったと思います。

#### アフリカを40年見続けて

わたしはやっぱり、すごくラッキーでした。最初にアフリカに行ったのは1964年でしょう。タンザニアが独立したのが63年ですから、独立直後から現在まで40年間、ずっと継続してタンザニアにいたわけではないけれども、かなりの時間を隔てて見ているんです。国民社会が形成されていくありさまとか、都市が発達していくありさまとかをね。わたしが最初に調査を始めるころには、アフリカには100万都市はひとつもなかったんですけれども、今は、12、3あります。アフリカ全体の人口も、そのころは3億3000万人といわれていたのが、今では6億8000万人といわれていますから、だいたい倍になりました。もっと、もっと増えていくでしょう。だけど、都市の人口はそれよりももっとも増えていく。それは、過疎化も起こっているということでもあるんだけれども……。そういうプロセスをずっと見てくることができた。これはラッキーだったと思います。

わたしがカメルーンにはじめて行ったころには、カメルーンにはヤウンデ大学ひとつしかなかったけれども、今大学が7つかな。その中のひとつにガウンデレ大学があります。ガウンデレはなんといってもウシのまちですから、ガウンデレ大学には、まず最初に畜産学部ができたんだけれども、そこにも社会学部ができて、その社会学のジルギ先生が、わたしがやってたガウンデレの調査をしたわけです。そのひとつはガウンデレのラーミド（王様）の継承の問題を扱って、もうひとつは、アラジ・アボっていうガウンデレが生んだ大金持ち、かれの経営の研究をしています。

おもしろいのはね、まちなかに本社の社屋があって、社長室もあるのだけれども、アラジ・アボはそんなところにいたことがない。ブカル

という、屋根はついているけど下は風が吹き抜けるような、屋根の下は柱だけの吹き抜けという、こういうフルベの伝統的な場所を中庭に作って、そこに彼の専用の絨毯を持ってきて、その絨毯を敷いて、そこに人を集めて、そこで毎日会議があるわけ。それが、重役会議なんです。で、自分の娘たち全部に、それぞれ見込みのあるイスラームの若者を押し付けて、それがみんな、手足になって働いている。そういうシステムを開発して。フルベ的というか、フルベはだいたいこういうところに集まってみんなでおしゃべりするのが習慣で、そういうのを延長した形で企業を大きくしていったって話だね。ただ、ガウンデレの普通のフルベなら考えられない経営方式でね。そして、見込みのある若者を、どんどん自分の一族の娘とめあわせて経営の基礎を作り上げていく。その過程を追求して、論文を仕上げたのです。

ただ、ジルギ先生はガウンデレで、もちろん、母語をつかって、わたしなんかよりずいぶん深い調査をやっていると思うんだけど、たとえば、そのアラジ・アボの出始めた1980年ころのガウンデレの様子なんかは、全然知らないんですね。まだ子どものころで、見ていない。そういう点でいうと、40年間継続的に見てきたっていうのは、けっこう大きな価値があるのかなあとと思いますよね。

わたしにとってもうひとつラッキーだったことは、毎年のようにアフリカに行けたということですね。日本学術振興会や国際交流基金などの長期滞在の援助ももらえたり、文部省の科研も、ある時期、6年くらい連続してもらいました。今は、科研も競争がはげしくて、けっこうたいへんですよね。もちろん、わたしが研究所にいたということもあります。学生がいないんですから、1年行きっきりでも、文句はいわれなわけですから。

#### 最初のころは緊張があった

はっきりいって、アフリカでは、最初のころは緊張があったと思います。ウジジにいてもけっこう緊張していたと思います。あるとき、自分でハッと気がついたんですけれど、1人で

緊張して歩いているときには、無意識に軍歌を口ずさんでいるんです。第2次大戦下に育ったわたしは、軍歌は、多分、それこそ100以上知っていますからね。無意識に軍歌をうたっていて、「あ、今緊張してるんだ」と思うことがある。鼻歌をうたうのはいつものことだけど、軍歌をうたうのは、無意識に緊張しているときなんです。

泥棒には何回か、あってますが、強盗にあったのは、夕方まだ明るいときにダレスラームのまち中で羽交い締めにされて、時計をとられたことがあります。いちおう大使館にとどけたら、大使館の広報に「日本の老教授がおそわれた」とか書かれて、それ以来、夕方にまちを散策することができなくなった。二度あったら「あいつ馬鹿じゃないか」といわれて、恥ずかしいですからね。

そういう点では、たったひとつちょっと怖かったことがあります。2002年にカメルーンに行ったんですよ。カメルーンのガウンデレからヤウンデまで、汽車もあるし飛行機もあるんだけど、飛行機がちょうど満席で取れなくて、でも汽車は辛気臭いんで、あまり乗ったことのない長距離の乗り合いバスで行こうっていうことで、バスの時間を見たら、ガウンデレを朝の5時に出て夕方の7、8時くらいにヤウンデに着くというバスがあったので、それに飛び乗ったわけ。そしたら、もう、途中で遅れに遅れて、真夜中の2時ごろにヤウンデに着いたのです。そして、まち外れの停留所で降ろされて、そこから乗り合いタクシーに乗ったのです。そしたら、相客もあって、そのタクシーがぐるぐるぐるると遠回りし始めて、最後はわたし1人になった。まちのどこを走っているのかもわからない。そのままね、それで襲われたらお終いだし、そのときはちょっと怖かった。だけど、けっきょくはちゃんとホテルに届けてくれて……。まあ、言い値の倍くらいのお金をあげちゃったけど。日本円でいうと1000円くらいのところを2000円くらい払ったけれども。その時はちょっと、さすが慣れてるっていうのも、このまま連れて行かれたらおしまいだなって思っ。うん、それくらいですね。

いわゆる冷戦が終わって、アメリカとソ連の勢力争いみたいなことがアフリカのなかからなくなっただけですが、それまでは、アメリカは、自分たちに肩入れするという国には、どんな独裁者がいても、どんな悪いことする人でも支持したしね、ソ連もそうだった。その中心が軍事援助、つまり武器供与でした。だから、アフリカにおける、独裁制というか、非民主的な国々は、アメリカとかソ連が介在したことによって、武器による圧政とクーデターが続き、持つ者と持たざる者の階層化が進み、都市に貧困層があつまってくる。そのような社会や経済不安や、一般人への武器の普及で治安がより悪化したということがああるわけでしょう。武器などいっぱいもたされて。だから、今になって偉そうに「独裁はいかん」とか「民主主義にならなくちゃ」とか何とかいう権利は、アメリカやヨーロッパの国々にはないはずですよ。

そういうなかで、昔はわたしが夜にでも平気で歩けたナイロビでもダレスラームにしても、またヤウンデにしても、もう今は危なくて歩けない。治安がすごく悪くなっている。それから、アフリカ人同士の殺し合い、それが当たり前になってきている。使われている武器のほとんど100%が、アフリカで作った武器じゃないわけだから、そういう点では、現代文明が悪いんだと思っているのだけれどもね。

そして、京都文教大学へ

総務庁の「世界青年の船」事業というのがあって、毎年、200人以上の日本や海外諸国の青年と一緒に、日本丸で、南アジア、アフリカ、ヨーロッパを旅するという事業をおこなってました。1994年にその団長に任命されて、シンガポール、スリランカ、ケニア、スエズ運河を超えて、ギリシャ、帰りはインドのボンベイと、2ヶ月も旅をしたのですが、ちょうどケニアのモンバサに停泊しているときに、日本から長距離電話が入りました。出てみると綾部恒雄先生で、再来年、京都に京都文教大学という大学ができる。そこには日本ではじめての文化人類学ができる。そこで働かないかというお誘いでした。開学の1996年は、ちょうど、わたしが28

年つとめた東京外国語大学を定年退職する年でした。ありがたく、その申し出をお受けして、張り切って、この大学にきました。

大学院の博士課程をのぞいて、専任で学部の学生を受け持って指導するというのは、この京都文教大学ではじめて経験しました。それは楽しかったですね。わたしは意外に教えるのが嫌いじゃないんだと、自分で思いました。それに、若いふりをして、孫ほどの若い仲間と一緒に過ごせたのもいい経験でした。ノー天気には自分では気づかないけど、案外、若い人たちには「あのくそじじい」とか「スケベじじい」とかいられていたのかもしれませんが。

わたしの教え方は、ほんとに不親切なんです。放っておくというか、1人でわたしがしゃべって、ノートを取りたければ取ればいい、ただ、出て来ないやつは損だといっているくらいだから。「この授業は出てきた方が得なんだから出てきた方がいい」、「あなたがたも都市に暮らしているわけで、いろんな形で都市を見る眼を身につけて、都市を見るのと、そうでないのと、どれだけ人生の楽しさが違うか」というようなことを、最初に話をする。

わたしは出席を取りません。途中で退席するのものがめません。出席を取らないで、単位はなるべく全員にあげる。それでも、出てきている人と出てこない人の差は、答案をきちんと読めばだいたいわかる。けれども、一度も出て来なくてもわたしを感心させるような答案を書くやつもいるかもしれないし、毎回出てきてもしようもないことを書くやつもいるかもしれない。それでは差がつかないと。だけど、わたしは、授業を聞きたくない学生が出て来ておしゃべりなんかすれば他人の迷惑になるから駄目だけれど、人には迷惑をかけないなら、居眠りしててもいいし、内職をしていてもいい。出席を取らないでそういう形でやる方がいいのではないかと思っています。

いつも期末の筆記試験の最後に、わたしの授業に対する感想や批判を書かせているのだけれども、おもしろいですよ。「出席をとらなかつたり、居眠りをする学生を放っておくのはけしからん」という学生も何人かはいたけれど、大半が

「このやり方がいい」って言ってくれたので、それで、最後までこのやり方を続けましたけどね。

卒論のテーマも、わたしは助言はするけれど、強制したことはありません。相談にはもちろんのりですが、あとは助言だけで、好きにさせます。でも、大半は、ちゃんと自分でテーマを見つけてきます。京都タワーとか、鳥原の旧遊郭とか、城下町の都市化とか、いろいろおもしろいテーマを自分でみつけてきました。ただ、11月までにテーマがきまらなくて、テーマを考えてやった学生が3、4人はいたかな。ある学生さんは、11月になってもきまらないから、ニューヨークで同時多発テロのあった、その年起こった9・11以後の新聞記事で、沖縄の観光について書かれた記事を「ひとつの新聞でいいから全部拾ってごらん」って言ったら、実際に図書館に通って書きあげました。また、他の学生さんには、「新京極と寺町の間の六角公園へ、ウィークデーと日曜日と朝から夕方まで時間をきめて行って観察してみる」って。わたしが見に行ったら、いました。1人で一生懸命ノートを取っていました。

最初のころは、学生のフィールドになるべく1回は一緒に行ってみるということをやっていました。さすがに、台湾をフィールドにした学生のところはいきませんでしたけれどね。長岡京も、長浜も、神戸のトアロードも、学生と一緒に歩きました。この学生は、トアロードの喫茶店を全部地図に落として、20軒かあるんだけれども、その中の7、8軒について深いインタビューをやりました。

#### 関西のあちこちに足をのばす

北海道時代、東京時代から、いろいろ聞いている、関西周辺で話題になっているところとか名所があるわけですね。せっかく関西にきたのだから、そういうところを、できるだけ歩いてみようと思って、開学の年の4月のある日、学校始まってまもなくの日曜日に、ふっと思い立って、「そうだ、吉野山に行ってみよう」って、吉野山へ行って、花見をして、ビールを飲んで帰ってきました。盛りは過ぎていたけれど、あと咲きの山桜が素晴らしかった。

それがはじめて、大阪、神戸はもちろん、姫路に行ったり、天橋立に行ったり、伊賀上野、長浜、彦根、信楽。それから、土曜日にふと思いついて、バスで徳島まで行って、徳島で泊まって。それで、汽車に乗って、高松まで出てきて、屋島へのぼって、讃岐うどんを食べて、フェリーで帰ってきました。それから、これは友たちがいたせいだけど、松山に行って2泊してきました。高知はナイル・エチオピア学会があって行ってきました。アフリカ学会で島根も行きました。松江、一畑電車にのって出雲大社も行ってみました。

でも、いちばんよく行ったのは、大阪の新世界周辺かな？ 今は圧殺されたけれど、動物園わきのカラオケ坂、そして、じゃんじゃん横町や飛田の旧遊郭（まだまだたくましく生き残っていましたが）、西成のドヤ街などをさんざんほつつき歩きました。京都では、裏寺町周辺がすきでした。新京極と河原町にサンドイッチのようにはさまれた20数軒のお寺がある通りです。

#### ザンジバルでのフィールドワーク実習

京都文教大学に来て、一度はフィールドワーク実習で学生をアフリカに連れて行きたいとは考えていましたが、治安もあまりよくないし、事故が起こればたいへんですし、はじめは躊躇していました。でも、世界中どこへ行っても、多分、同じような確率で、いろいろなことが起こるのではないかと。それなら、わたしの愛するアフリカの空気を若い人たちと一緒に吸ってみたい、好きだったまちを見せたいと思うようになりまして。

そこで、カメルーンに連れて行くっていう手もありましたが、交通がちょっと不便すぎてね。バス1台でも借り切っていけば別だけど。ザンジバルだったら、全部公共の飛行機と船で行けるわけだから。まあ、ザンジバルは、このところわたしがいちばんよく行って、人脈もある程度あるということもあってね、ザンジバルに連れて行く方がいいかなと思って、連れて行ったんだけどね。わたしは正解だったと思っています。

1980年代にわたしがはじめて行ったときと

は、大きく様変わりしていて、10軒ほどだったおみやげ店が、通りいっぱいになっていたり、数軒しかなかったホテルが40軒にもなっていたり、公衆電話さえなかったところに、携帯電話が普及し、インターネットカフェが10軒以上も出来ていたり、また、本土でしかお目にかかれなかった観光マーサイ<sup>9)</sup>が何十人もいたり、若い学生たちにとっては、かえって違和感がなかったかもしれません。でも、停電は当たり前だったり、洗髪中にとつぜん断水になったり、水洗トイレがバケツでの水洗になったり、日本では経験できなかったこともいろいろあって楽しかったと思います。また、迷路のように狭く曲がりくねった路地で迷子になったり、夜店やアフリカンバー（お茶屋）で買い食いしたり、自由に遊び回っていたようです。ちょっとした悪ガキにだまされかけたりという事もあったようですが……。夜の9時には、点呼をかねての隊員会議、その日覚えたスワヒリ語や起こった出来事を報告したり、また、市場で材料を買ってきて、ホテルの炊事場でボーイさんになってスワヒリ料理を作ったり、海で泳いだり、髪をスワヒリ風に編んでもらったり、ヘンナで身体を染めてもらったり、つめにアフリカ風のマニキュアを塗ってもらったり、目いっぱい自由に暮らせたと思っています<sup>10)</sup>。

連れて行った1人の女子学生が日本に帰ってきて、親に「おまえはアフリカから生意気になって帰ってきた」といわれたと聞いていましたが、これは、「おまえはアフリカで成長してかえってきた」というほめ言葉ではないかと、わたしは自分勝手に思っているのです（資料8）。

まあ、今は、自分でも機会は作れるんですね。30万円のお金があれば行けるわけだから。だいたい、飛行機が往復20万円しないですからね。その他に、アメリカドルで300ドルもあれば、1日10ドルくらいの安ホテルにとまって、バス旅行なんかで動けば、そんなたいへんじゃない。そういう目を開かせ、道を開いたというのはたしかにありますね。なんだ、わたしもちょっと工夫すれば行けるんだというね。

2回にわたって行った36人のなかで、10人以上が、その後また、ザンジバルに行っています。



資料8 ザンジバルでの京都文教大学の学生たち

ほかにも「キリマンジャロへのぼってきました」とか、「タンザニアのモロゴロに11ヶ月行ってました」とか、「エジプトに行ってきました」、「マルタ島へ行ってきました」とか、いろいろ歩いてるみたいだし。それから、9月に帰ってきて、すぐに、ピースボートに乗って、3ヶ月の旅。アルバイトで120万円かなんか貯めて、世界旅行に出かけて行った子もいます。みんな頼もしく育っているよね。

#### アフリカにはいちばんいい時に行けた

このところは、アフリカへ行けば、ザンジバルとウジジへ行くということになってます。去年(2002年)はカメルーンにも行きましたが、バングブーム村のベラカは死んだし、サルキヤキも死んだ。子どもたちが皆大きくなって大喜びはしてくれるけれども、やはり時代の変遷を感じさせます。わたしはいちばんいい時に行ったと思っています。前のベラカが、矍鑠としていて、むらに君臨してましたから。そして、その末期にもわたしがインタビューできるくらいにまだ元気だったときに行けたんですから。まあ、例のガンハの王様に死なれたのは

ちょっと残念だったけど<sup>11)</sup>。

ウジジの場合も、やっぱりわたしはいちばんいい時に行ったと思います。ウジジに行くと、今でも前と同じように、みんな道端で座ってのんびりおしゃべりしている。それだけを見ると、何にも変わってないように見える。けれども、じつは大きく変わっているんです。というのは、ちゃんと仕事に就いて、お金を稼いで生活を安定させようという若ものは、ウジジにいても安定しませんから、みんな首都ダレサラームなど、都市部に出稼ぎなんかで出てしまって、貧乏でもウジジでのんびり暮らしているのがいいという人たちだけが残っているということになっているからね。いっぱい2円のカハワ(コーヒー)を片手に、おしゃべりをしたり、ドミノやランプをしたり、コーランを読んだり、のんびり時間を過ごしています<sup>12)</sup>。

阪本公美子さんという、なぜスワヒリ中心地域は低開発になったか(ウジジももちろんその好例)というテーマで博士論文を書いた、日本の優秀なアフリカニストの女性がいるんだけど、開発が進んだところとウジジをくらべても、けっきょく、どっちが幸せかというのは、そういう研究からは出てこないんですね。ウジジ近くの行政都市キゴマの人びとが、ウジジのスワヒリについていう悪口も、とうぜん、ウジジの人たちは怠け者だ、時代遅れだというのです。

でも、キゴマにはいっぱいスリや、ひったくりがいますが、ウジジにはまずいない。毎金曜日には、おおくの善男善女が、モスクにあつまってきますし、何かといえば、コーランの一節を引用する。それが、もうみんなの常識のなかに組み込まれていて、みんなが当たり前のうになずく。貧しい老人にはさりげなくサダカ(喜捨)をかかさないし、老人の昔話や愚痴話を、忍耐強く、笑いを持ってうけとめる人びとが、まだ、ウジジにはいっぱいいます。もっとも、外からきた役人や、教師にとっては、何となく扱いにくい人びとと思われてはいますが……。

#### アフリカの人の顔色

カミさんともよくしゃべってるのだけれども、

アフリカに行って、アフリカの人の肌の色が黒いなんていうことを、感じたことがない。黒いんですよ。でも、それがむしろ普通の顔で、「今日は、酒で酔っ払って赤い顔している」とか「今日は顔色が悪い」とか、そういうのまで、顔色が見えるわけね。日本に帰って写真見ると、わたしとカミさん、明らかに2人だけ真っ白けの顔をしてるわけですね。でも、アフリカではそういうことをほとんど意識しない。

でも、向こうもやっぱりこっちをいろいろ見ていて、後から、わたしが行ったところは子どもだった子が大人になってから、「あの時は怖かった」という話をされたことがあります。それは、うちのカミさんが、夜にランプの光の下で、もちろん上半身にも布を巻いてるのだけれど、肩や腕は裸で、髪の毛を洗っていたのです。長い真っ黒な髪の毛を洗っていたのですが、それが、「ヨーコだってわかっていただけだけれども、でも、こわかった」って。

というのは、マミワタ (mamiwata) という魔物の存在が信じられているからです。マミワタというのは、マミは母、あるいは女、ワタはウォーターですよ。そのままいうと「水のお母さん」ということになるわけです。それは、色が白くて髪が黒くて長くて、それが夜遅くなって、子どもが川なんかへ行くと、引き摺り込むという、まあ日本の河童伝説みたいなのが部族を超えて、広く流布しているわけ。それで、「ヨーコだとわかっていただけ、こわかった」って。だけどその時は言えなくて、大人になってはじめて言って。

ああ、そういうこともいっぱいあるんだろうなあって思うんですがね。夜暗闇で口笛を吹いたり、上天の星を指さして見上げたり、話すときに相手を指さしたり、やってはいけないことが、いっぱいあるんですね。それが、けっこう、タンザニアとカメルーンで一致していたりして驚きました。日本でもおなじ事がいえるのかな？

#### 時代と縁にめぐまれた研究人生

わたしにとってアフリカは、出会いでしょうね。一期一会というか、ラッキーなさだめとい

うか。たぶん、わたしが南アメリカに行っていたら、やっぱり同じように南アメリカで楽しくやっていたんじゃないかなとも思いますけどね。ただ、やっぱり、フロンティアから見たということも含めて、アフリカをたまたま選んだのが、非常にラッキーな場所だったということはいえると思います。

まあ、やっぱり、それも運が良かったんだろうなあ。そして、行ったところ行ったところで、みんなとても良くしてくれた。ほんとに良くしてくれた。だから、バングブームとガウンデレとウジジとザンジバル、そしていくらか苦しい思いはしたけれどエル・ロセイレス、これはみんな、わたしの懐かしいふるさとです。今でも行けば、もう皆が喜んで迎えてくれるしね。ちょっとエル・ロセイレスだけはたいへんだっただけだね。ここは今内乱でとても行けません。どうなってますか。スーダン西部のダルフルでは、人口の20%以上を占めるフェラータ住民たちがアラブの潜在的抵抗勢力とみなされ、攻撃の標的にされて、苦勞していると思います。悲しいことです。

思い起こしてみると、日本文化のフロンティアである北海道に生まれ育って、闇市華やかなりしころの札幌の盛り場を通過して中学、高校へ通い、まち遊びを覚えたのが、わたしの原点だったのでしょ。大学へ入って、映画に目覚め、これも、今のビデオやITの時代とちがって、すぐれて都市的な題材でした。それが縁となって、鈴木榮太郎先生、富川盛道さんに出会って、社会人類学的な都市研究を学び、そのままいけば、北海道の都市研究者に育っていたのかと思います。それも多分楽しい一生だったのでしょ。これも縁でアフリカに出会ったのです。アフリカでの研究は、これも縁でしょ。スワヒリ文化やハウサ・フルベ文化というアフリカの代表的な都市的文化の周辺部に対象が選ばれていきました。それが、図らずも、東西のアフリカ都市社会の比較研究というかたちになっていったのだと思います。文化圏の周辺から中心へというアプローチが、その文化の構造、全体像を理解する方法になったのかと思います。

若いときからの遊び人、怠け者ですから、シャープないい仕事をしたとは、ぜんぜん思っていません。もっと勤勉で精緻な研究者がおなじ出合いをしたら、多分、もっともったいい仕事を仕上げたのだらうと思います。でも、わたしののんびりして、遊び三昧、仮説は自分が目で見て実地で考えたデータからつくる。そして決して気負って結論を性急には求めないというモラトリアムのフィールドワークがもたらした、いい面もあるのかなあとも思います。富川さんがつねづね言われていた、「フィールドでは、わからないということに耐えなければいけない」という言葉が、わたしのフィールドワークの方法を基本的にささえたのではないかと思います。

時代的にいえば、「ほしがりません勝つまでは」の1億総決起時代から、敗戦後の貧しいながら平和な時代、それに続く豊かな飽満の時代、そして、なんとなく人類の終焉が見えてきた時代まで、いい時代と、いい縁に恵まれたのかなと思います。なんととっても、人生の大半を平和な暮らしに全うできたのはしあわせでした。平和憲法の下で、戦争も内乱もなく暮らせることが、もっとも「美しい国」なのではと、わたしは思っています。次代の方々には、この平和がいつまでも続くように、そして、今日このごろのキナ臭い世界をむしろそれに巻き込んでいく、そういうグローバリゼーションを実現できるようにという希望を申し継ぎたいと思います。

ころよく、また、忍耐強く連載をつづけてくださった、京都文教大学の人間学研究所のみなさんに感謝いたします。そして、その機会をつくり、仕上げてくださいました鶴飼正樹さん、テープ起こしの片岡千代子さん、あらゆることで出版のお手伝いをしていただいた立石尚史さん、ありがとうございました。

## 注

- 1) 鶴飼正樹「モラトリアム研究者の思い出—日野舜也さん座談③ カメルーン」『人間学研究 京都文教大学人間学研究所紀要』6 (2006) p153
- 2) Hino Shun'ya "Fulbe People in the African Urban Society, a Comparative Study of Cameroon and the Sudan" *Unity and Diversity of a People: The Search for Fulbe Identity: Senri Ethnological Studies* No.35. National Museum of Ethnology, (1991)
- 3) 鶴飼正樹「モラトリアム研究者の思い出—日野舜也さん座談② タンザニア」『人間学研究 京都文教大学人間学研究所紀要』5 (2005) p.197
- 4) 日野舜也「アフリカの庶民にとって国家とは何か」小田英郎編『アフリカ：その政治と文化』慶応通信 (1993)
- 5) 日野舜也「東アフリカにおけるスワヒリについて」『アジア経済』10-2 (1969)
- 6) 日野舜也「都市とエスニシティー—アフリカ都市における事例」『文化人類学』1-2 (1985)
- 7) Hino Shun'ya "Swahilization, Westernization, and Nationalization in Tanzania" *African Urban Studies* I (1990)
- 8) 鶴飼正樹 (2005) p.192
- 9) 本来の伝統的生活である牧畜生活から離れて、都市で土産物を買ったり、観光案内で生業をたてているマーサイの人びと。ちなみに、最近、京都文教大学大学院の田部亜里沙くんが、このザンジバルの観光マーサイの調査研究をはじめている。
- 10) 日野舜也・石川真作編『フィールドワーク実習の記録 スワヒリ文化を学ぶ』京都文教大学人間学部文化人類学科 (2003・2004)
- 11) 鶴飼正樹 (2006) p147
- 12) 日野舜也「ウジジの27年：東アフリカ内陸スワヒリ都市の社会変化」『アジアアフリカ言語文化研究』48・49合併号 (1995) pp.455-494  
鶴飼正樹 (2005) pp.211-212